

山形元屋敷遺跡

発掘調査報告書

2002

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

やまがたもとやしき
山形元屋敷遺跡

発掘調査報告書

平成14年

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



古墳時代の土器

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、山形元屋敷遺跡の調査成果をまとめたものです。

山形元屋敷遺跡は、山形県の県庁所在地である山形市の南端部にあります。平成12年度に新たに発見され、遺跡として登録されました。

この度、花川住宅宅地開闢河川整備促進事業に伴い、工事に先立って、発掘調査が行われることになりました。

調査では、古墳時代の竪穴住居のほか、平安時代の掘立柱建物も検出されました。また、現在の花川の旧河道も検出され、古墳時代の土器をはじめとして、多くの遺物が出土しました。特に古墳時代初頭の土器群は県内でも発見例が少ないものであり、貴重な資料を得たといえます。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及・学術研究・教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成14年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 木村 宰

例　　言

- 1 本書は、花川住宅宅地関連河川整備促進事業に係る「山形元屋敷遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 既刊の年報、調査説明資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。
- 3 調査は山形県村山総合支庁建設部の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 調査要項は下記のとおりである。

遺　　跡　名　　山形元屋敷遺跡
遺　　跡　番　号　平成12年度新規登録
所　　在　地　　山形県山形市大字片谷地字元屋敷
受　　託　期　間　平成13年4月1日～平成14年3月31日
現　　地　調　査　平成13年6月11日～8月24日
調　　査　主　体　財団法人山形県埋蔵文化財センター
調　　査　組　織　理　事　長　木村　宰
　　　　　　　専　務　理　事　斎澤　晋作
　　　　　　　事　務　局　長　長岡　徳高
　　　　　　　調　査　第　四　課　長　渋谷　孝雄
　　　　　　　主　任　調　査　研　究　員　斎藤　主税
調　　査　担　当　者　調　査　研　究　員　水戸部秀樹（調査主任）
　　　　　　　調　　査　　員　渋谷　純子

- 5 本書の作成・執筆は、水戸部秀樹（I～IV・VII）、渋谷純子（V）が担当した。また、「VI 自然科学的分析」についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。
- 6 委託業務は下記のとおりである。

空中写真撮影　　日本特殊撮影株式会社
樹種同定　　パリノ・サーヴェイ株式会社
遺物実測図作成　　有限会社アルケー・リサーチ

- 7 出土遺物、調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。
- 8 発掘調査および本書を作成するにあたり、下記の方々からご協力、ご助言いただいた。

山形県村山総合支庁建設部、村山教育事務所、山形市教育委員会、岩崎卓也、田島明人、真保昌弘
(順不同、敬称略)

凡　例

- 1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

S T ... 竪穴住居	S B ... 掘立柱建物	S K ... 土坑	
S D ... 溝跡	S G ... 川跡	S P ... ピット	
S X ... 性格不明遺構	R P ... 登録土器	R Q ... 登録石器	R W ... 登録木製品
- 2 遺構番号は、現地調査段階での番号を、そのまま報告書の番号として踏襲した。
- 3 遺構図に付す座標値は平面直角座標系第X系により、高さは海拔高で表す。方位は座標北を示す。
- 4 遺構実測図は1/40～1/300の縮図で採録し、各々スケールを付した。
- 5 本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物図版とも共通のものとした。
- 6 遺物実測図・拓本図は1/1～1/5で採録し、各挿図にスケールを付した。
- 7 遺構実測図中の遺物実測図は1/8で採録した。
- 8 遺物実測図中の土器について、土師器などは断面を白抜き、須恵器は断面を黒ベタで表示した。
- 9 遺物観察表中において、括弧内の数値は図上復元による推計値を示している。
- 10 基本層序および遺構覆土の色調記載については、1997年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版基準土色帖」に拠った。
- 11 「第2図 山形盆地南半の地形分類図」は『土地分類基本調査 山形』を基に小林圭一が作成したものを使用した。

目 次

I 調査の経緯..	1
II 遺跡の立地と環境..	3
III 遺跡の概観..	6
IV 遺構..	7
V 遺物..	11
VI 自然科学的分析..	19
VII 調査のまとめ..	21
遺物観察表..	24
遺構実測図..	36
遺物実測図..	47
報告書抄録..	64

表

表1 土師器分類表	12
表2 樹種同定結果	20
表3 土器観察表	24
表4 石器・石製品・礫観察表	34
表5 木製品観察表	34

挿 図

第1図 遺跡概要図	1
第2図 山形盆地南半の地形分類図	4
第3図 遺跡位置図	5
第4図 基本層序柱状図	6
第5図 土師器分類図(1)	13
第6図 土師器分類図(2)	14
第7図 川跡S G 1 土層断面図	36
第8図 調査区全体図、川跡S G 1 土層断面図	37
第9図 川跡S G 1 土層断面図	39
第10図 穴住居S T 69	40
第11図 穴住居S T 83・90	41
第12図 穴住居S T 77、溝S D 109、掘立柱建物S B 102・103	42
第13図 穴住居S T 77、掘立柱建物S B 102・103	43
第14図 掘立柱建物S B 101、柵列S A 96・107	44
第15図 掘立柱建物S B 101	45
第16図 溝S D 61、土坑S K 7	46

第17図	古墳時代の須恵器、土師器(櫛)	47
第18図	櫛	48
第19図	櫛	49
第20図	甕、壺	50
第21図	壺	51
第22図	壺、甕壺類の底部	52
第23図	甕壺類の底部	53
第24図	甕壺類の底部、台付甕、坏	54
第25図	鉢、瓶、高坏	55
第26図	高坏、器台	56
第27図	丸底壺、小型土器、手づくね土器	57
第28図	平安時代の須恵器(坏)	58
第29図	高台付坏、蓋、甕、壺、水瓶	59
第30図	平安時代の土師器(甕)、赤焼土器(高台付坏)	60
第31図	赤焼土器(坏)、縄文土器、陶器	61
第32図	勾玉形石製模造品、石器、礫	62
第33図	柱材、礎板、杭	63

図 版

巻頭図版	古墳時代の土器
図版 1	調査区全景
図版 2 ~ 5	豊穴住居
図版 6 ~ 9	掘立柱建物、柵列、溝
図版10 ~ 12	川跡 S G 1
図版13	竈
図版14・15	甕
図版16・17	壺
図版18	甕壺類の底部
図版19	甕壺類の底部、台付甕、杯
図版20	鉢、瓶、高坏
図版21	高坏
図版22	器台、丸底壺
図版23	小型土器、手づくね土器
図版24	奈良・平安時代の土器、坏・ヘラ書き
図版25	坏、高台付坏、壺、蓋、水瓶
図版26	その他の須恵器、土師器(甕)
図版27	赤焼き土器、縄文土器、石器、礫
図版28	勾玉形石製模造品、柱材、礎板、杭
図版29	木材 1
図版30	木材 2

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

今回の発掘調査は、山形県村山総合支庁建設部による花川住宅地開連河川整備促進事業に伴う調査である。山形元屋敷遺跡は平成12年度に発見され新規登録された。事業の予定地内に遺跡が含まれるため、遺跡の遺存状態を確認することを目的として、平成12年5月・10月に教育庁社会教育課文化財保護室により、試掘調査が行われた。その結果、良好な状態で遺跡が遺存していることが明らかとなり、事業開始前に遺跡を記録保存するための緊急発掘調査が必要となった。特に試掘トレンチNo.12からは下図の土師器の甕などが出土している。

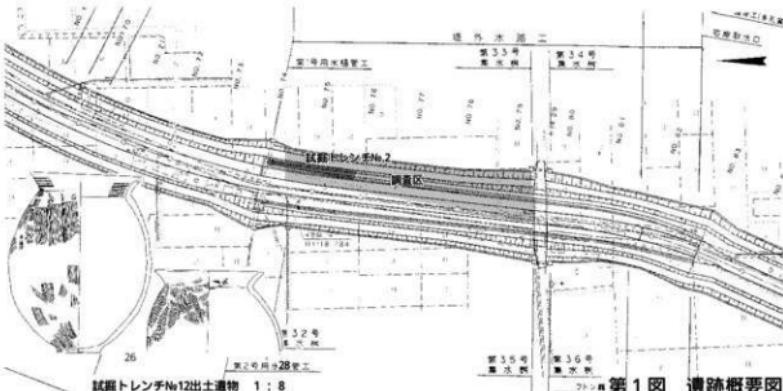
関係機関との協議の結果、調査対象面積は2,000m²、調査期間は平成13年6月11日から8月10日となった。なお、調査は最終的に8月24日まで延長された。

平成13年4月2日に県村山総合支庁建設部長と県埋蔵文化財センター理事長の間で「埋蔵物発掘調査業務の委託契約」を締結し、発掘調査が開始された。

2 調査の経過と方法

平成13年6月8日、山形県村山総合支庁会議室において、山形元屋敷遺跡発掘調査事前打ち合わせ会を開催し、発掘調査に至る経過報告・調査機関・調査体制・調査の方法・安全対策などを確認した。以下に大まかな発掘調査の経過を記す。

平成13年6月11日に現地において調査に係る諸準備を行った。本調査は6月18日から開始した。最初に重機による表土除去を行い、これに並行して遺構検出、グリッド杭の敷設などの作業を行った。



グリッドは平面直角座標系第X系のX軸・Y軸に沿った方向で設定した。グリッドの間隔は2m四方とした。グリッドの名称とした数字は、西から東へ大きくなる数字と南から北へ大きくなる数字を、それぞれ座標軸のY軸とX軸に沿わせた。その数字の組合せを、X軸とY軸の交点の第1象眼となる2m方眼のグリッド名とした。

調査区は、花川の護岸工事、水田による削平を受け部分的に搅乱されていたが、試掘調査の成果どおり、調査区南半を中心に良好な状態で遺存していた。特に遺跡の西に隣接する花川の旧流路（川跡SG1）からは多数の土器が出土した。調査で出土した遺物の多くはこの川跡からのものである。

その後、遺構検出、遺構精査、そして遺構断面図・遺構平面図の作成、遺構断面・遺構の完掘状況・遺物出土状況の写真撮影などの記録作業を進め、8月20日にラジコンヘリを用いた業務委託による空中写真撮影を行った。遺物の出土地点の記録については、遺構から出土したものは遺構とグリッドと層位により、遺構外から出土したものはグリッドと層位によった。

8月3日には発掘調査説明会を開催し、報道機関も含めおよそ70名の参加があった。

発掘調査は順調に進められたが、調査区内の盛土が予想以上に厚く盛土の除去に手間取ったこと、遺構面が古墳時代・平安時代の2面検出されたことで、当初予定した調査期間内では終了することが困難となつたため、担当者間で協議の上、調査期間を8月24日まで延長した。

8月24日に調査を終了し、現場を引き渡した。その後、発掘調査報告書作成のため整理作業を開始した。



川跡SG1

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

山形元屋敷遺跡（1）の所在している山形市は、山形県の中央、山形盆地の南西部に位置する。東部は奥羽山脈が南北に連なり、その南半は蔵王火山帯に属する。これらの山地に源を発する馬見ヶ崎川・滑川・高瀬川・紅葉川などが北西流し、平地で扇状地を形成している。西部では上山市から流入する須川が、西部の山地から流下する小河川を併せ北流する。山形元屋敷遺跡の西隣を流れる花川もこれら的小河川の一つである。須川はその後白川・立谷川と合流し、最上川に注ぐ。また、須川には蔵王火山から強酸性の金山川・蔵王川・酢川などが流入するため、灌漑用水には不適とされ、市西部の農地も馬見ヶ崎川の用水堰から取水することが多かった。気候は内陸型気候で、年間平均最高気温と最低気温との差が約10度と大きく、年間降水量（降雪量も含めて）も1,000mm程度である。

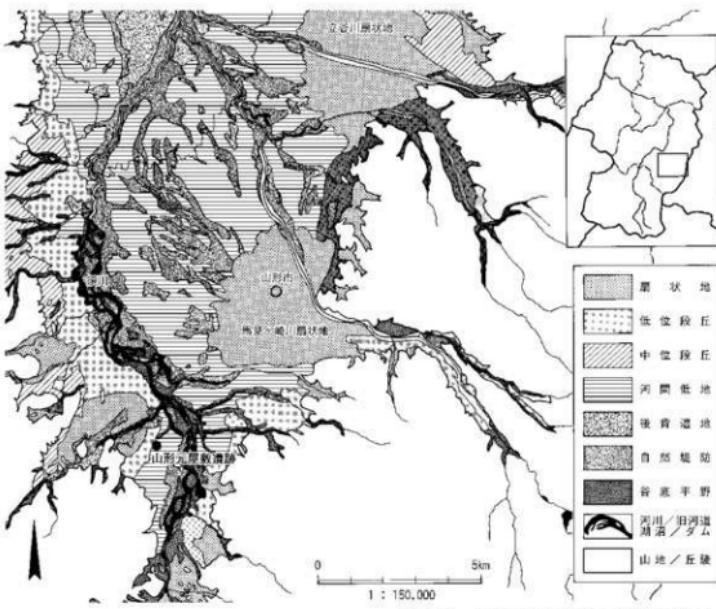
山形元屋敷遺跡は地形分類では河間低地に、地形区分では金井低地に位置する。西側には須川氾濫源が、東側にはその須川により沖積世に開拓された山辺段丘が見られる。また、遺跡南側には蔵王火山泥流による久保手丘陵がある。これら須川左岸地域一帯は遺跡の密集地帯であり、遺跡の時代・種別もそれぞれの地形に応じて多様である。すなわち、山形元屋敷遺跡の所在する金井低地から東の山辺段丘、本沢川扇状地にかけては、古墳時代を中心として縄文時代から平安時代の集落遺跡が多く見られ、また同じく山辺段丘上で本遺跡の北西の菅沢、柏倉付近にも菅沢古墳群などの遺跡が知られている。他にも久保手丘陵にはオサヤズ窯跡（73）をはじめとした奈良時代から平安時代の窯跡群がある。一方須川右岸地帯は、左岸地帯に比べ遺跡の密度は明らかに低い。これは前述のとおり蔵王火山からの強酸性の河川が多く、灌漑には適さないこともその理由の一つと考えられる。

2 歴史的環境

周辺に見られる遺跡では、旧石器時代では久保手丘陵にハケ森遺跡（74）・ニツ石遺跡（76）の分布が確認されている。縄文時代ではやはり久保手丘陵に石原坂A遺跡（80）など、そして山辺段丘上には特に多くの集落遺跡が確認されている。百々山遺跡（62）は縄文時代中期の遺跡で、大木7b式の土器が出土している。二位田遺跡（34）からは縄文時代中期末の大木10式の土器が発掘調査で出土している（佐藤ほか1976）。

須川左岸は弥生時代の遺跡が多いことでも知られている。須川左岸には山形盆地の南西に位置する白鷹丘陵に源を発する本沢川など幾筋もの小河川が扇状地を形成している。山辺段丘でも須川氾濫源と本沢川扇状地に挟まれた一帯に沢田遺跡（42）・石田前Y遺跡（49）・花川遺跡（53）など弥生時代後期の遺跡が多い。低地に囲まれた段丘上に位置しており、稻作が開始された頃の集落と水田の立地条件を反映しているものと考えられてい

* 遺跡名の後の括弧内の数字は「第3回 遺跡位置図」内の番号に対応する。



第2図 山形盆地南半の地形分類図

る（佐藤・加藤1982）。また二位田遺跡でも弥生時代後期の桜井式に併行する土器の出土が報告されている。

やがて時代が下り、それまでまばらに分布していた弥生時代の遺跡周辺に古墳時代の集落遺跡が急増し、さらにその分布範囲を広げていく。山形元屋敷遺跡で出土した古式土師器には、そのなかでも最も古い段階に位置づけられる土器群がある。

5世紀中頃に築造されたと考えられている菅沢2号墳（26）からは、円筒埴輪・朝顔形埴輪・器財埴輪を中心とする豊富な形象埴輪が出土している。山形盆地内では、古墳は限られた地域にごく少数が築造されているだけだったが、菅沢2号墳が築造される頃から盆地内の各地にその分布を拡大し、数も大幅に増加していった。報告書（藤沢1991）では、その背景に畿内政権の介在を想定し、大きく拡大した古墳築造可能な階層を取り込む形で畿内王権を中心とする勢力が、地方経営を拡大していくとしたとしている。また出土したこれら畿内の特徴を色濃く残した埴輪は、菅沢2号墳の被葬者が畿内を中心とする先進地域の勢力と結びついた結果、もたらされたものとしている。

奈良時代から平安時代の遺跡も、近年調査された石田遺跡（50）など数多く確認されている。倉庫跡と考えられる縦柱の掘立柱建物・柵列・区画溝などが検出され、官衙的な性格を持ち、周辺地域のなかでも中心的な遺跡と考えられている（山口・吉田2000）。



本図は国土地理院発行の2万5千分の1地形図「山形南部」を複製・加筆し、2分の1に縮小したものである。

第3図 遺跡位置図（1：50,000）

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	山形元城敷	集落跡	古墳・奈良・平安	43	裕裕J	集落跡	縄文・平安
2	門伝日光山	散布地	縄文	44	中程田	集落跡	縄文
3	南館	鉢		45	斎田鉢	縄文	
4	山形西高野敷内	集落跡	縄文・弥生	46	奥出城	古墳	
5	大之越古墳	古墳		47	谷柏	集落跡	古墳・平安
6	塙辛田	集落跡	奈良・平安・諱倉	48	石田前	集落跡	古墳
7	柏賀・八種	散布地	縄文	49	石田前Y	散布地	弥生・奈良・平安
8	寒	散布地	縄文	50	石田前W	包囲地	
9	治合中丁	集落跡	縄文	51	裏跡様古墳	古墳	
10	柏賀鉢	鉢		52	長谷當城	城壁	
11	鶴	城壁跡・散布地	縄文・室町	53	花川	集落跡	弥生・古墳
12	荒堀	鉢		54	鹿沙門	集落跡	古墳
13	窪	祭祀跡	縄文	55	谷柏古墳群	古墳	
14	中林古墳群	古墳		56	高崎	集落跡	奈良
15	十二目田田人	散布地	縄文	57	谷谷地	集落跡	平安
16	永大八ツ又裏	台形		58	谷谷地	集落跡	
17	松尾町	集落跡	縄文	59	谷谷地	集落跡	
18	謙ヶ羽	集落跡	奈良・平安	60	新ノ森	散布地	縄文
19	坊屋敷	集落跡	縄文・古墳	61	古峯山	經保	平安
20	三月田	集落跡	縄文	62	百々山	集落跡	縄文・平安
21	青田	集落跡	古墳	63	津坊	散布地	平安
22	吉原館ノ内	城壁跡	中世	64	横手区	集落跡	縄文・古墳・室町
23	落合	集落跡	古墳・奈良・平安	65	66	城鉢跡	縄文・室町
24	上山角下り龜古墳	古墳		67	城跡野	散布地	平安
25	葛沢古墳群	古墳		68	風穴	穴	
26	金池古墳群	古墳		69	六埋	集落跡	縄文
27	大清水	集落跡	縄文・平安	70	天神山	山岳祭祀跡	縄文・江戸
28	若宮館	鉢		71	能野堂	窟跡	平安
29	前明石古墳群	集落跡	平安	72	松原	包囲地	平安
30	百目鬼	集落跡	平安	73	オサヤズ聚跡	包囲地	縄文・奈良・平安
31	葛沢山本陣跡	砦跡		74	八ヶ森	散布地	旧石器
32	寺	集落跡	古墳・奈良	75	八ヶ森南	散布地	縄文
33	二位田	集落跡	縄文・弥生・奈良・平安	76	牛石	散布地	旧石器
34	山落	集落跡	古墳	77	戸戸田	集落跡	縄文
35	本沢川	集落跡	縄文	78	オミロク火葬墓群	墳墓	古代・中世
36	急力寺南	集落跡	縄文	79	鳴沢川	集落跡	縄文
37	萩原	集落跡	古墳・平安	80	石原坂A	散布地	縄文・平安
38	木戸	遺物巴董地	縄文	81	藤木	集落跡	縄文
39	前田	集落跡	縄文	82	長者屋敷	窟跡	平安
40	喜平田	集落跡	縄文	83	小松原聚跡	生產跡	平安
41	沢田	集落跡	弥生・平安				

III 遺跡の概観

1 基本層序

遺跡の現況は北半が水田で南半が畠地であった。そのため北半の水田部分は大きく削平されており、遺構・遺物とも少なかった。すぐ西隣を花川が北流しており、その護岸工事のため搅乱されている部分も多かった。表層地質図では砂・泥などの未固結堆積物地帯であることが示されている。沖積世において須川により開析された低地であることがその要因である。また、調査区内には花川の旧流路も検出されており、須川に注ぐ小河川である花川が幾度も流れを変え、洪水層や腐植質層・砂層・礫層を形成しながら間断なく流れ続けていた痕跡が明瞭となった。

基本層序は第3図に調査区東壁と南壁の断面図の中から一部を抜粋し柱状図として図示した。東壁a-a'の2・3層は水田の旧耕土であろう。以下の層はやはり、須川の開析低地であることを示すものである。南壁b-b'の2・3層は花川の護岸工事によるもので、以下の層は東壁a-a'と同様である。

2 遺構と遺物の分布

遺構は少ないが竪穴住居・掘立柱建物・柵列・川跡・溝・土坑・ピットなどが調査区南を中心で検出された。遺構の一部は耕作による削平だけでなく、花川の護岸工事などにより失われている。遺構の検出状況から、遺跡はさらに東へ広がることが明らかとなった。

遺物は主に竪穴住居、土坑、川跡から出土している。特に川跡からは遺物総数52箱のほとんどが出土している。出土している遺物は古墳時代初頭から中期の土師器、8世紀末から10世紀初頭の土師器・須恵器が主である。また掘立柱建物の柱穴からは良好な遺存状態の柱材も検出された。花川上流から流れ込んだと考えられるローリングを強く受けた縄文時代の遺物も数点出土している。



第4図 基本層序柱状図（1:50）

IV 遺構

1 穫穴住居

S T 69 (第10図)

遺構が密集している調査区南半、23-28グリッド付近に位置する。南北長は7.25m、東側は調査区壁に接しており、調査区内では最大で3.25mまでを検出した。主軸方位はN 2°E（北で東に2°振れる、以下このように略す）を測る。平面図は床面上での完掘状況を掲載した。

カマドは西壁中央部に設けられており、カマド内とみられる箇所には天井部が崩落したとみられる土層（b-b'の1・2層）が堆積している。またその中央部には土師器の甕がほぼ二個体分（第20図29、第24図75・76）出土しているが、カマドで使用された可能性のあるものと考えられる。

b-b'の3層はカマド使用時に堆積したものと考えられ、炭化物と焼土が含まれている。その中央部に礫が、下半部を埋設された状態で検出されており、土師器の甕29・75・76の直下であることも併せて考慮すれば、支脚として使用された可能性もある。カマドの袖部には両側ともに構築材として用いられたと考えられる土器が出土した。

柱穴はS P 94・92、他に床面上で検出したピットS P 81は深さが5cmの浅い遺構であるが、土師器の杯87がほぼ完形で出土した。

住居の掘形は壁際が中央部より低く掘り込まれ、特にカマド部分については大きく掘り込まれている。

遺物は前述した土師器のほかには甕の破片が覆土中より少量出土している。

S T 77 (第12・13図)

23-33グリッド付近に位置する。東壁部分は搅乱により遺存していない部分があるが、調査区内でほぼ全容が確認された。南北6.78m、東西は東壁が遺存しないため正確に計測することはできないが、7m前後と見られる。平面図は床面上での完掘状況である。

カマドは東壁の搅乱部分に設けられていた可能性は否定できないが、遺存していた住居内では検出されなかった。柱穴は4基、それぞれ四隅に柱穴S P 93・91・88・87が床面上で検出された。

掘形は断面図に示したように壁際が中央より深く掘り込まれていることがa-a'の断面図で確認できる。3層が竪穴住居の覆土、4層上面を床面として捉えた。4・6層を掘形としたが、その間に5層の溝S D 109が入る。つまり、竪穴住居の掘形の下層に対して掘り込まれた溝S D 109が、掘形の上層の土に覆われているのである。溝の埋土は粒の大きさの揃わない砂であり、人為的に埋められたと考えられる。平面図では住居の中央付近にL字形に配置されており、またその方向も住居の向きに揃っており溝S D 109と竪穴住居S T 77の密接な関連性を示す。住居を作るために地面を掘り込み、床面を構築するまで

の間に、意図的に砂を埋めるための溝を掘ったと解釈できる。生活を営んだ床面上ではなく、地下に砂を埋めた溝を構築することにどのような目的があったかは不明である。

遺物は少ないが、覆土中から小型土器138、壺甌類の底部81、柱穴S P 88から同じく小型土器137が出土している。方位の振れはN23° Eである。

S T 83 (第11図)

21- 27グリッド付近に位置する。南北長は3.75m、西半部は削平されており検出されなかった。東半部においても床面は検出されず、わずかに掘形が残るのみである。掘形の壁際部分は一段低く掘り込まれてあり、伴う遺構はピットS P 84があるが、位置的に柱穴とは考えられず、住居の掘形の一部とすべきであろう。掘形からは土師器の杯88が、ピットS P 84からは土師器の甌31が出土している。方位の振れはN12° Wである。

S T 90 (第11図)

22- 26グリッド付近に位置する。本来は竪穴住居であったと考えられるが、やはり削平を受けているため、掘形の底面付近が溝状に残るのみである。S T 83と重複しているが、前後関係は不明である。また、本来の遺構の規模が遺存していればS T 69とも重複していたと考えられる。遺物は出土していない。

2 掘立柱建物

S B 101 (第14、15図)

20- 29グリッドから22- 33グリッドに位置する桁行4間、梁間2間の南北棟の掘立柱建物。南北8.3m、東西5.2m、柱間寸法はややばらつきがあるが、桁行は7尺、梁間は8.7尺前後である。柱穴にはすべて柱痕が確認され、S P 30とS P 12を除いたすべての柱穴で柱材、あるいは礎板を検出した。S P 13では礎板と柱材が併せて検出され、S P 36では礎板のみ検出されている。柱穴の規模は大きいものでは1辺の長さが84cmを測るものもある。柱材の径ではS P 14から検出された柱材215が25cmを測り、最大のものである。建物の方位の振れはN 7° 4' 42" Wである。

S B 102 (第12、13図)

23- 30グリッドから東壁にかけて検出された東西棟と考えられる建物で、桁行は2間以上、梁間3間である。ただし、北側柱列の西から3基目の柱穴は検出されなかった。東西3.4m以上、南北5m、柱間寸法はばらつきが大きいが、平均すると桁行、梁間ともそれぞれ5.5尺となる。柱痕はすべての柱穴で確認されたが、柱材の残るものはなかった。建物の方位の振れはE 6° 9' 27" Sである。

S B 103 (第12、13図)

21- 31グリッドから23- 33グリッドに位置する桁行2間、梁間2間の南北棟の建物で、規模は南北4.5m、東西2.9mである。柱間寸法はやはりばらつきを持つが、平均すると桁行7.5尺、梁間5尺となる。柱穴の断面を確認したものについてはすべて柱痕を検出したが、柱材が遺存するものはなかった。柱穴の底面の高さは、各側柱列の中央に位置する柱

穴が他の2基より低くなる特徴を持つ。建物の方位の振れはN 3° 30' 50" Eである。

3 柵列

S A96 (第14図)

21- 30グリッドから21- 33グリッドに位置する南北に4間、長さ6.25mの柵列である。柱穴の規模は小さく、長軸で16cmから35cm程である。柱間寸法は一定ではなく、平均で5.2尺となる。柵列の方位の振れはN 13° 51' 31" Wである。

S A107 (第14図)

21- 31グリッドから21- 32グリッドに位置する南北に2間、長さ3mの柵列である。S P56の掘形が他に比して深いが、断面図に見られる柱痕の底面の標高はS P100の底面の標高とほぼ同じである。方位の振れはN 6° 25' 8" Eである。

4 溝

S D61 (第14図)

24- 33グリッド付近に位置する幅20cmの円形に巡る溝である。その直径は3.6mを測る。検出面からの深さは2.5cmから8cmと浅い。重複するS T77の覆土上で検出されたのでS T77よりは新しい。さらに重複するピットが4基検出されたが、南西隅のものは搅乱であり、南東隅のものも浅い。北西隅と北東隅のピットはS D61の覆土を切っており、溝が廃絶された後に掘り込まれたものである。ゆえに、S D61と直接関連するものとは考えられない。遺物は出土しておらず、時期、性格ともに不明である。

5 土坑

S K7 (第16図)

22- 28グリッド付近に位置する、不定形の深い土坑であるが、出土する遺物は他の遺構とは様相を異にし、底部切り離し技法がヘラ切り技法の須恵器の杯148・149など、比較的時期の古い遺物が一括で出土している。

6 川跡

S G1 (第7、8、9図)

調査区の西隣を北流する現行の花川の旧流路である。調査ではかつての花川から護岸工事の施された現在の花川に至るまでの流路の変遷が明らかとなった。調査の対象としたのは、その多くの流路の中でも遺物を含み古代以前に属するものとした。

調査区南西隅は削平を受け、S G1は検出できないが、17- 18グリッドから検出され始める。流路は大きく東に蛇行し、その後西へ流れを変え調査区西壁に接する。断面図c-c'・d-d'がここまで箇所にあたる。出土する遺物から、古代までの遺物が出土する層を上層、古墳時代初頭から後半の遺物が出土する層を下層と分層する。上層はS G1

の東端に沿うように検出されている。

調査区西壁20- 36グリッドからSG1は再び調査区内で検出される。ただし、検出されるのは流路の右岸のみであり、左岸は調査区外に延びさらに西へ続くものと考えられるため、流路の幅は明らかでない。ここまで流路は西へ大きく蛇行しており、ST67・SB101を始めとする遺構群が流路の右岸に築かれている。これらの遺構群から北ではSG1以外の遺構はほとんど検出されなくなり、調査区北半のほとんどがSG1の中となる。

断面図e-e'では上層と下層の間に、洪水が起源と考えられる遺物を含まない砂層が検出された。下層の遺物はここまで出土するが、21- 41グリッド以北では出土しないため、再び下層の遺物が出土し始める26- 46グリッドまで上層のみの調査とした。第4図調査区全体図にも古代の遺物を含む上層のみの完掘状況を図示している。

断面図f-f'の4層が上層で、6層が下層である。間の5層はやはり洪水による層で、荒砂と礫層が交互に堆積し、遺物を含まない。大きく6層を切り取っており、これにより多くの遺物が下流に流されたとみて良いだろう。

26- 46グリッド以北は削平を受けていることもあり、上層は検出されない。出土する遺物も古墳時代のものに限られる。断面図g-g'の1層・3層・9層は植物遺体を多く含んだ層であり、流れが淀んだ箇所であることを示している。

断面図h-h'では4層・5層を下層として認識した。層は薄く幅も狭く、遺物の量も少なくなるが、さらに北の断面図i-i'の2層・4層では再び遺物が多く出土する。しかし、これより北では断面図j-j'の3層で若干出土するのみで、遺物の出土はほぼ見られなくなり、これ以上SG1を掘り下げることはせず範囲を確認するにとどめた。第4図では点線でその範囲のみを示した。

調査区内ではSG1が西へ蛇行したその内側のみに竪穴住居や掘立柱建物などの遺構が見られ、その一帯を除いてはほぼすべてがSG1ということになる。古代までの遺物が出土する層を上層、古墳時代の遺物が出土する層を下層としたが、どちらもほぼ同じ流路を形成している。また、竪穴住居や掘立柱建物などの遺構群も古墳時代、古代と同じ箇所に重複して築かれている。これらの遺構の覆土には水成堆積による埋没があったことも確認できなかったし、河川によって破壊された形跡もない。断面図g-g'では流れが停滞し淀んでいることも確認された。

つまり、古墳時代から古代までのSG1の流路は幾度かの洪水は見られるが、大きく流路を変えることもなく安定した流れを保ち、近隣の集落に利用されていたことが推察される。竪穴住居、掘立柱建物がSG1の直前に築かれており、両者が重複しないこともその証左となるものと考えられる。

V 遺物

山形元屋敷遺跡の出土遺物には、須恵器・土師器・陶器などの土器、柱材・礎板・杭などの木製品、石製模造品・凹石などがある。また、土師器のなかには、口クロで成形された、いわゆる「赤焼土器」と呼ばれるものも含まれる。これらの出土遺物のうちもっとも数の多いものは土師器であり、なかでも古墳時代のものと考えられる土師器が多量に出土している。

1 土器

i 古墳時代の須恵器

須恵器は1~3の3点があり、すべて川跡SG1からの出土である。1・2が甕、3が壺口縁部と考えられる。1は口縁端部を欠くがほぼ完形で、下層から出土している。体部下半にはケズリ調整が施される。体部の孔は焼成前に外側から内側に向かってあけられている。5世紀中頃(TK216併行期)のものと考えられる。2は口縁部から頸部にかけての形状が1に類似するが、頸部に波状の櫛描文がみられる。1とほぼ同時期のものと考えられる。3は焼成・胎土が1・2に類似するが、詳細は不明である。

ii 古墳時代の土師器

川跡SG1から、古墳時代の4世紀初頭から5世紀後半までの時期幅がみられる土師器が大量に出土した。しかし、全体の形状が分かるものが非常に少ない。そのため、これらの遺物の概要をつかむために、古墳時代の土師器について分類を行った。分類は器種をアルファベットの大文字、器形を数字、細部の特徴をアルファベットの小文字で表す。なお、分層的に把握が行えなかったこともあり、編年には至らなかった。

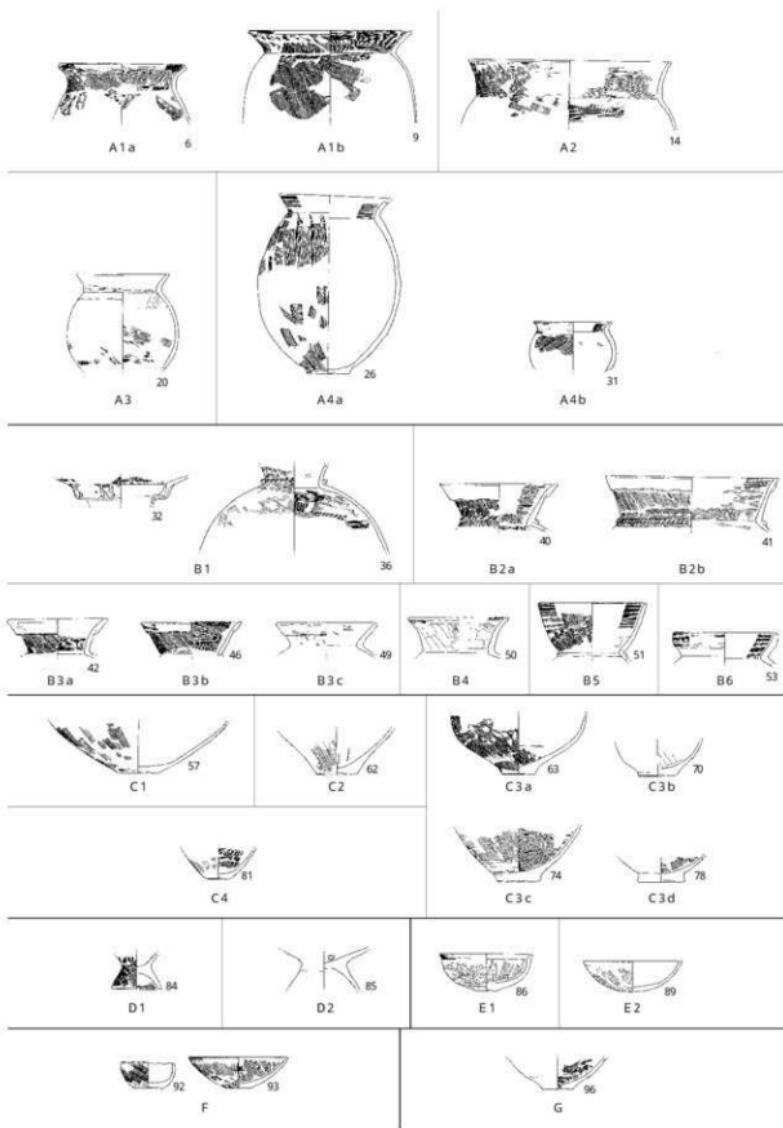
出土した古墳時代の土師器の器種は、A甕・B壺・C甕壺類(底部)・D台付甕・E坏・F鉢・G甑・H高坏・I器台・J丸底壺・K小型土器・L手づくね土器などである。このうちA~Cに分類した甕壺類は最も出土数が多かったが、完形もしくは完形に近い形まで復元できたものが少なかったため、上半部と下半部に大きく分け、A・Bは主に口縁部に着目して分類を行い、Cは底部形態から分類を行った。Cについては甕壺のいずれであるか判断が困難であったため甕壺類底部として扱い分類した。A~Lのそれぞれの分類の詳細は、表1および第5・6図のとおりである。

A 甕

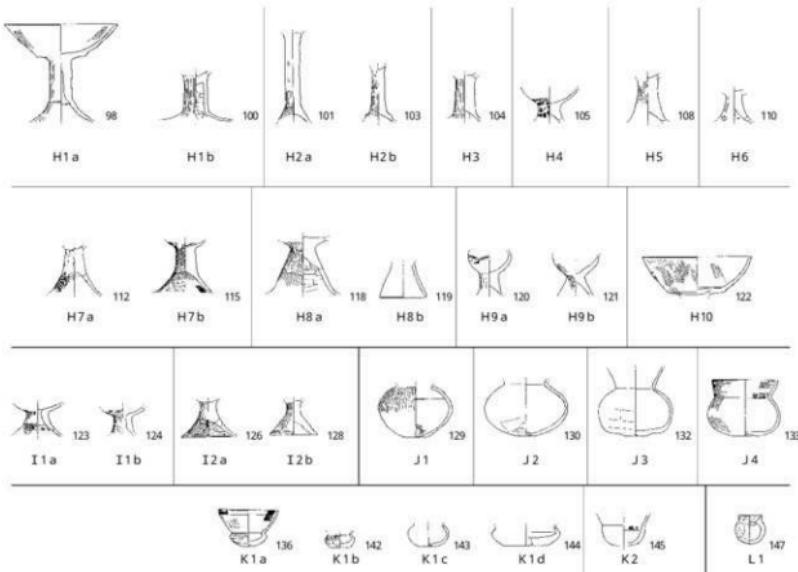
最も出土数の多い器種である。28点を図示した。口縁部の形態からA1~A4に细分される。A1については口縁端、A4については体部の形状からそれぞれさらにa・bに细分した。図示した遺物は4~6をA1a、7~9をA1b、10~15をA2、16~21をA3、22~30をA4a、31をA4bに分類した。A1・A2に分類される甕は、ともに4世紀前

表1 土師器分類表

器種(部位)	分類	形態
A 横 (口縁部)	1 a 薄手で、口縁端が内側に屈曲する。	
	1 b 薄手で、口縁端を面取る。	
	2 薄手で、口縁部が長く伸び、屈曲する	
	3 厚手で、口縁部が「く」の字型に屈曲する。球胴形の体部を持つ。	
	4 a 厚手で、口縁部が「く」の字型に屈曲する。長胴形の体部を持つ。	
	4 b 厚手で、口縁部が「く」の字型に屈曲する。長胴形で、肩部の張る体部を持つ。	
	1 有段口縁を持ち、頸部が直線的に伸びる。	
	2 a 折返し口縁で折返し部が広く、頸部に突帯を持つ。	
	2 b 折返し口縁で折返し部が広く、頸部に突帯を持つ。口径・頸部径が大きい。	
	3 a 折返し口縁で、広く厚い折返し部を持つ。	
B 罩 (口縁部)	3 b 折返し口縁で、狭く厚い折返し部を持つ。	
	3 c 折返し口縁で、広く薄い複合部を持つ。	
	4 単純口縁で縁やかに外反し、長く伸びる。	
	5 縁やかに内湾し、長く伸びる。頸部に突帯を持つ。	
	6 内湾する短い口縁を持つ。	
	1 リング状に突出する底部をもち、胴部が張る。	
	2 底部を平らに切り離す。	
	3 a 突出する小型の底部を持つ、胴部が張る。	
	3 b 突出する底部を持つ。aに比べ立ち上がりが詰まる。	
	3 c 突出する底部を持つ。卵形の胴部を持つ。	
C 壺復類 (底部)	3 d 高く突出する底部を持つ。	
	4 小型で厚い台形の底部を持つ。	
D 台付櫛	1 小型で、ハケメ調整が施される。	
	2 大型で、明確な調整が施されない。	
E 坏	1 口唇部が外側に屈曲する。	
	2 口唇部が直線的に立ち上がる。	
F 鋢	大型のものと小型のものがある。1点ずつの出土である。	
G 瓶	破片のみの出土である。単孔を持つ底部、取手の付く体部、口縁部などの破片がある。	
H 高坏	1 a 脚部中空で坏部と福部の境界に段を持つ。	
	1 b 脚部中空で坏部と福部の境界に段を持たない。	
	2 a 中実の長い脚部を持つ。福部との境界の上に段を持つ。	
	2 b 中実の長い脚部を持つ。福部との境界の下に段を持つ。	
	3 脚部中実部が短い。H2類に比べ径が大きい。	
	4 脚部中実部が非常に短い。	
	5 脚部中実部が下に向かって太くなる。	
	6 脚部中実部が短く、福部の内側えぐりが続い。福部に3つの透かし孔が開く。	
	7 a 脚部中実部が短く、福部の内側えぐりが比較的緩やかである。福部が大きく聞く。透かし孔を持つ。	
	7 b 脚部中実部が短く、福部の内側えぐりが比較的緩やかである。福部が大きく聞く。透かし孔を持たない。	
I 器台	8 a 大型で坏部直下から脚部が「八」の字型に聞く。端部が外反する。	
	8 b 比較的小型で坏部直下から脚部が「八」の字型に聞く。端部が外反しない。	
	9 a 小型で丸みの強い坏部を持つ。直線的な脚部中実部を持つ。	
	9 b 小型で丸みの強い坏部を持つ。脚部中実部が非常に短い。	
J 丸底壺	10 坏部のみの出土である。形はH1に似るが、内面に接し縫を持つ。	
	1 a 受部から脚部に至る孔を持つ。福部に透かし孔を持つ。	
	1 b 受部から脚部に至る孔を持つ。福部に透かし孔を持たない。	
	2 a 短い中実部を持つ。福部は大きく広がり、端部が外反する。透かし孔を持つ。	
K 小型土器	2 b 短い中実部を持つ。福部は大きく広がり、端部が外反する。透かし孔を持たない。	
	1 体部の最大径が体部中央より上にある。くぼみ底を持つ。	
	2 体部の最大径が体部中央にある。くぼみ底を持つ。	
	3 他に比べて体部が深い。平底を持つ。	
L 手づくね土器	4 他に比べて頸部の径が大きい。くぼみ底を持つ。	
	a 壺型で、体部の最大径が体部中央より上にある。径の小さい底部を持つ。	
	b 壺型で、体部の最大径が体部中央よりや上にある。径の大きい底部を持つ。	
K 小型土器	c 壺型で、体部の最大径が体部中央にある。径の小さくくぼみ底を持つ。	
	d 壺型で、体部が浅く、大型で、最大径が体部中央より上にある。径の大きい底部を持つ。	
L 手づくね土器	2 鋌形で深い体部を持つ。	
L 手づくね土器	小型の壺型土器1点のみの出土である。	



第5図 土師器分類図(1)



第6図 土師器分類図(2)

半代のものと考えられ、薄手で堅い焼成が特徴的で、丁寧なハケメ調整が施される。A 3・A 4に分類される甕は、5世紀代のものと考えられるが、A 1・A 2に比べ厚手ではあるが脆く、体部の形態などからA 3がA 4よりも古いと考えられる。特徴的なものとしては、口縁端部が上方につまみ上げられた4~6がある。A 1 aに分類した4~6の口縁端部にみられるつまみ上げは、畿内にみられる庄内大和形甕の口縁部に類似しており、何らかの形で影響を受けていることも考えられる。

B壺

口縁部の形態、頸部の立ち上がりからB 1~6に細分し、B 2・B 3についてはさらに細分した。時期については各分類の中で時期幅があると考えられるが、B 6に分類した口縁部が内湾するものは、5世紀代にみられる形態である。B 4・B 5はそれぞれ1点のみの出土である。B 5は丸底壺の口縁部と考えられ、頸部に突帯を持つ。図示したものは、32~56の25点である。32~38をB 1、39・40をB 2 a、41をB 2 b、42~45をB 3 a、46~48をB 3 b、49をB 3 c、50をB 4、51をB 5、52~56をB 6に分類した。特徴的なものとしては、口縁部内側に櫛描きを持つ32・37がある。これらは東海系のいわゆるバレス壺の影響を受けていると考えられ、4世紀初頭の年代が考えられる。32はさらに口縁部外面に棒状浮文・円盤状浮文もみられる。36の頸部にみられる刻みの付いた突帯も、同様に

バレス壺の影響を受けている可能性がある。また、B類全体に見られる特徴としては、折返し口縁を持つものが多いことがあげられる。これらをB2・B3に分類した。B2に分類される一群は、ほぼ同じ時期のものと考えられる。B3は折返し部の形状からa・b・cに細分され、胎土・焼成などからも時期幅があると考えられる。

C 蔊壺類（底部）

底部については壺・甕の特定が困難であるため、C 蔊壺類（底部）として一括した。中央部が窪む平底の底部を持つものが多く見られる。底部形態からC1~4に分け、C3についてはそれぞれの特徴によってさらに細別した。C1・C3a・C3bは薄手で堅く焼成されており、調整も丁寧である。ともに4世紀代のものと考えられ、焼成・胎土が近いことから、A1・A2・B1・B2に組み合う底部と推測できるが、完形で出土しているものがないため確定することができなかった。C1・C3aよりも新しいC2・C3c・C3dは5世紀代のものと判別できるが、体部の形状や調整などから、C2がより古いものと考えられる。C3c・C3dはA3・A4に焼成・胎土が非常に類似しており、組み合うものと考えられる。C4は甕類の底部と思われるが、点数が少なく、焼成・胎土等が類似する口縁部・体部なども出土していないため、詳細は不明である。57~81の25点を図示、57~59をC1、60~62をC2、63~68をC3a、69~70をC3b、71~76をC3c、77~78をC3d、79~81をC4にそれぞれ分類した。

D 台付甕

台付甕は、4世紀代に多くみられる器種であるが、いずれも台部のみの出土であり、詳細は不明である。出土した4点すべてを図示した。小型で丁寧なつくりのものをD1、大型粗製のものをD2とし、82~84をD1、85をD2に分類した。

E 坯

坯は、底部の形態などにも差異があるが、ここでは、口唇部の形態に注目してE1・E2に細分した。86~91の6点を図示、86~88をE1、89~90をE2に分類した。91は底部のみのため、細分は行わなかった。底部は丸底のもの、くぼみ底のもの、窪んだ六角形のものがある。いずれも5世紀後半代のものと考えられる。

F 鉢

92・93の2点を鉢とし、Fに分類した。92は小型で、体部には粗いハケメ調整を施し、底部近くはケズリで調整している。93は口縁部がわずかに残る。甕壺類の底部に類似するが、より丁寧なハケメ調整が施されている。

G 甌

破片のみの出土であるため、細別は行わず大別のみにとどめた。94~97の4点を図示した。94は口縁部破片で、内外面がハケメ調整されている。95は取手の付く甌の体部と考えられるが、取手部分は抜け落ちている。外面で縦方向に、内面では横方向のハケメ調整が認められる。96・97は甌底部の破片である。単孔を持ち、内部をハケメで調整している。4点とも胎土・焼成などが異なり、時期差があると考えられる。

H高坏

主に脚部の形態に注目してH 1 ~ 10に細分した。このうちH 6・H 7が最も古く、4世紀初頭のものと考えられる。以下、H 4・H 5が4世紀前半、H 1 a・H 2 a・H 2 b・H 3が4世紀末から5世紀初頭、H 1 bが5世紀前半、H 9 a・H 10が5世紀中頃のものと考える。H 1 aとH 2 a・H 2 bには時期的に大きな差はないが、H 1 aが先行すると考えられる。H 8 a・H 8 b・H 9 bについては類例に乏しく、年代は決定できなかった。あるいは器台の可能性もある。25点を図示した。98・99をH 1 a、100をH 1 b、101・102をH 2 a、103をH 2 b、104をH 3、105・106をH 4、107・109をH 5、110をH 6、111・112をH 7 a、113・115をH 7 b、116をH 7、117・118をH 8 a、119をH 8 b、120をH 9 a、121をH 9 b、122をH 10に分類した。120・121は高坏としてH 9に分類したが、器台の可能性もある。高坏は川跡SG 1の岸に当たる20-37グリッド付近から、まとめて廃棄されたと考えられる状態で出土している。ここから出土した高坏はH 1・H 7に分類されるもので、少なくとも二時期にわたって廃棄されたと考えられる。

I 器台

受部から脚部にかけて貫通する穴の有無でI 1・I 2に分類し、透かし孔の有無でそれぞれa・bに細分した。器台は、古い段階のものに大型で透かし孔が多く、調整の丁寧なものが多いとされる。出土したものはいずれも小型であり、透かし孔は3孔か無孔であることから、器台としては比較的新しく、4世紀後半のものと考えられる。また、I 2のように受部から脚部に抜ける貫通孔が見られない器台も、4世紀後半には増える傾向にある。123・128の6点を図示した。123をI 1 a、124・125をI 1 b、126をI 2 a、127・128をI 2 bに分類した。

J 丸底壺

底部の形態と、体部の最大径の位置に注目してJ 1~4に細分した。時期については詳細は不明である。129~135の7点を図示し、129をJ 1、130・131をJ 2、132をJ 3、133をJ 4に分類した。134・135に関しては底部のみであるため、細別は行わず、大別にとどめた。時期には幅があるようである。133は赤彩されており、古い段階のものの可能性がある。

K 小型土器

壺形と鉢形K 1・2に分け、壺形については最大径の位置でさらに細別した。器台と組み合わせて使用されたと考えられるもので、4世紀代のものと考えられる。136~146の11点を図示した。136~141をK 1 a、142をK 1 b、143をK 1 c、144をK 1 d、145・146をK 2に分類した。140は赤彩されている。

L 手づくね土器

147の1点のみの出土であるため、大別のみとした。体部には指頭痕がみられ、体部を指押しで丸く作り出した後、粘土を足して口縁部を作っている。

iii 平安時代の須恵器

平安時代のものと考えられる須恵器は、遺跡全体から出土している。これらは、壺・高台付壺・蓋・甕類・水瓶などの器種が認められた。

壺は148～164の16点を図示した。148・149はともに土坑SK7から出土している。ほぼ同形で底径が大きく、底部の切り離しは回転ヘラ切り技法による。8世紀末～9世紀初頭のものと考えられる。底部が回転ヘラ切り技法で切り離されているものはこの2点のみである。150～164はいずれも形状が類似しており同時代のものと考えられる。底径が小さく、底部が回転糸切り技法で切り離されていることから、9世紀第3～第4四半期のものと考えられる。150・151にはヘラ書きが施されている。151は体部内側に文字と思われるヘラ書きが施され、「□人」と読めるが、□部分は読解できない。150は底部に「×」と推測されるヘラ書きがみられる。

高台付壺は165～167の3点を図示した。いずれも底部を回転糸切り技法で切り離しており、9世紀半ば以降のものと考えられる。

蓋は168～172の5点を図示した。168・169が比較的古く8世紀末、170～172は9世紀第3四半期のものと考えられる。

このほかの須恵器は177を除き、細片である。173～182の10点を図示した。173～179が甕、180・181が壺、182が水瓶と考えられる。甕には大型のものと小型のものが見られる。水瓶182は8世紀末～9世紀初頭のものと考えられる。出土したものは体部破片のみで、斜め上方に向かう穿孔が見られる。孔は焼成前に外側から内側に向かって開けられており、体部に穴を開けた後注ぎ口を貼り付けている。

iv 平安時代の土師器

甕・高台付壺・壺が出土した。土師器には非口クロ成形のものと、口クロを用い須恵器とほぼ同じ技法で成形された、いわゆる「赤焼土器」と呼ばれる一群がある。183～206の24点を図示した。183～193が非口クロ成形の土師器で、194～206が「赤焼土器」の範疇で理解されるものである。

甕類はすべて非口クロ成形の土師器である。183～193の11点を図示した。183のように小型で胴部の短いものと、190～192のように長胴のものがある。190～192は同じグリッドから出土しており、胎土・焼成がとともに類似することから、同一個体とも考えられる。甕底部には網代痕をもつものが多く見られ、ほかに187のように木葉痕を持つものも見られた。また、183のように内面に黒色処理を施す甕もみられる。

高台付壺はすべて破片である。194～196の3点を図示した。194・195は内面に黒色処理が施されている。

壺は197～206の10点を図示した。底部の切り離しは、回転糸切り技法による。体部の形状などから10世紀初頭頃のものと考えられる。

▽ そのほかの遺物

縄文土器

207は大木 8 a 式と考えられる縄文土器。口縁部の破片が 1 点のみ川跡 S G 1 から出土している。強くローリングを受け、磨耗している。

陶器

208は肥前陶器の皿で S T 69 に重複する落ち込み状の遺構である S X 10 からの出土である。残存部は底部のみで、内外面に灰釉が施されるが、外面下半は無釉である。畳付には糸切り痕が残る。目跡は確認できないが、胎土目段階（16世紀末から17世紀初頭）のものと考えられる（九州近世陶磁器学会2000）。

209は志野の菊皿で盛土からの出土である。内外面に長石釉が施されるが、底部は無釉である。見込に円垂ビンの痕跡が残る。17世紀前半のものと考えられる（瀬戸市史編纂委員会1998）。

210は肥前陶器の擂鉢、やはり盛土からの出土である。内面に 9 条 1 単位の卸目が施され、底部切り離し技法は回転糸切り技法による。底部の脇には指頭痕が見られ、内面には灰釉の釉滴が見られる。17世紀前半のものと考えられる（九州近世陶磁器学会2000）。

石製模造品

211は勾玉形の石製模造品で、石材は粘板岩、上部に裏面からの穿孔が施されている。また、背部に溝状の加工が施される。

凹石

214の凹石は表面に 2ヶ所、裏面に 3ヶ所の凹みがある。強くローリングを受けている。

礫

212は川跡 S G 1 から出土した擦痕を持つ礫である。表裏面とも幅 1.5 カm から 2 cm の擦痕が幾条も確認される。213は竪穴住居 S T 69 に設けられたカマド内から出土した礫である。出土状況を観察すると、カマドを構築した際に同時に埋め込まれたものであり、強く被熱しているため、支脚としての機能を負っていたものと考えられる。

柱材・礎板

215は掘立柱建物 S B 101 の柱穴 S P 14 の柱材で、遺存していた柱材の中でも最も径が大きく 25 cm を測る。幅 1.5 cm から 2 cm の工具による加工痕も認められる。

216は同じく S B 101 の柱穴 S P 13 から出土した柱材。218・219・220 は同じ柱穴から出土した礎板で、216 の下に敷かれている状態で出土した。217も同じく S B 101 の柱穴 S P 52 から出土した柱材。

杭

221と222は川跡 S G 1 の古墳時代の遺物を包含する下層から出土した、杭と見られる木製品である。末端部が斜めに切断され、切断面には炭化した箇所が見られる。

VI 自然科学的分析

山形元屋敷遺跡から出土した木材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

山形元屋敷遺跡は、須川の支流である花川東岸（右岸）の沖積地に位置する。地形的には、本沢川が形成した扇状地の扇央部付近に立地する。本遺跡では、発掘調査により古墳時代および平安時代の遺構・遺物が検出されている。また、沖積地に位置するため、掘立柱建物跡の柱穴内には礎板や柱材が残存しているものも見られた。

本報告では、平安時代の掘立柱建物跡などの柱穴内から出土した柱材・礎板および古墳時代の河道から出土した木製品の樹種同定を行い、用材選択に関する資料を得る。

1 試料

試料は、柱穴内から出土した柱材・礎板や河道から出土した木製品など23点である。

2 方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

3 結果（図版29・30）

樹種同定結果を表2に示す。木材は、針葉樹2種類（マツ属複維管束亞属・スギ）、広葉樹2種類（コナラ属コナラ亞属コナラ節・クリ）に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・マツ属複維管束亞属 (*Pinus* subgen. *Diploxyylon*) マツ科

軸方向組織は仮道管を主とする。垂直樹脂道および水平樹脂道が認められる。分野壁孔は窓状で、1分野に1個。放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、1~15細胞高。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2~4個。放射組織は単列、1~15細胞高。

・コナラ属コナラ亞属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圈部は1~2列、孔圈外小道管は漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと複合放射組織がある。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圈部は1~4列、孔圈外で急激~やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高。

4 考察

掘立柱建物跡の柱穴内から出土した柱材と礎板は、1点がクリに同定された他は、全てコナラ節であり、柱と礎板で種類構成に差異は認められない。このことから、柱材や礎板には、コナラ節を主とした用材選択が行われていたことが推定される。

山形県内では、これまでにも奈良・平安時代の掘立柱建物跡の柱材の樹種同定が行われている（阿部1994、パリノ・サーヴェイ株式会社1996：未公表資料）。それらの結果を見ると、クリとコナラ節が利用されている点では、今回の結果と一致するが、クリの利用が圧倒的に多く、種類構成比では異なっている。材質的に見ると、コナラ節・クリ共に重硬で強度が高いが、耐朽性はクリ材の方が優れている。これまでの結果でクリが多い背景には、強度と共に耐朽性等の材質が考慮された結果と考えられる。これらの事例と比較すると、今回の結果は用材選択が異なっていた可能性がある。この背景には、建物の用途や機能、建築方法、周辺植生など様々な要因が考えられる。今後、隣接する地域で掘立柱建物が検出され、柱材などが出土した場合には樹種同定を行い、今回と同様の傾向が見られるのか確認したい。

一方、旧河川等から出土した木製品は、いずれも用途が不明である。複維管束亞属3点、スギ1点が認められた。いずれも針葉樹材が利用されており、加工が容易な木材を選択したことが推定される。山形県内では、同時期の木製品の樹種を明らかにした例が少ないため、現時点では製品と樹種との関係は不明な点が多い。今後、さらに多くの木製品について樹種同定を行い、用材選択の実態を明らかにしたい。

表2 樹種同定結果

遺構名	出土地点	辨認番号	登録番号	種類	樹種
掘立柱建物S B 101	S P 13	216	RW78	柱材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		219	RW79	礎板	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		220	RW80	礎板	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		218	RW81	礎板	コナラ属コナラ亜属コナラ節
	S P 23	RW75	柱材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
		RW73	不明材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
	S P 30	RW74	柱材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
	S P 33	RW70	柱材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
	S P 34	RW76	柱材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
	S P 35	RW82	柱材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
		RW83	礎板	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
		RW84	礎板	クリ	
		217	RW85	礎板	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		RW87	柱材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
柱穴 S P 52	S P 36	RW92	礎板	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
		RW88	柱材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
		RW89	柱材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
	S P 42	RW89	柱材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
	S P 14	215	RW77	柱材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
	S P 52	RW86	柱材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
	下層 26.48 G	222	RW162	不明材	マツ属複雜管束亞属
川跡 S G 1	下層 26.48 G	221	RW163	不明材	マツ属複雜管束亞属
	下層 27.46 G	RW164	不明材	マツ属複雜管束亞属	
	下層 28.51 G	RW165	不明材	スギ	

VII 調査のまとめ

山形元屋敷遺跡の調査の成果としては平安時代の掘立柱建物群の検出、古墳時代の集落の検出、花川の旧流路を検出したことなどが挙げられる。特に古墳時代の出土遺物に関しては土師器の壺32など県内でも他に類例を見ない遺物が出土した。この壺を含め、古墳時代初頭に位置付けられる土器群は、県内での出土例は稀少である。

1 古墳時代

竪穴住居S T 69からは5世紀代と考えられる29・75・76などの甕・甕壺類（底部）がカマド内から出土している。また、床面上で検出されたピットS P 81からは土師器の壺87がほぼ完形で出土した。ゆえにS T 69の時期は5世紀後半と考えられる。また、S T 83は堀形のみだが、同じく5世紀後半の壺88が出土しており、両者は同じ時期の住居として理解できる。住居の方位の振れはS T 69がN 2° E、S T 83がN 12° Wであり大きな違いはない。S T 90も堀形のみ検出された竪穴住居と考えられる遺構である。遺物は出土していないが、方位はS T 69・S T 83と大差なく同じ時期の遺構と見て良いだろう。ただし、両者とは重複関係にあるため同時には存在しない。

S T 77からは出土した遺物は少ないが、4世紀代のものと考えられる小型土器137・138が覆土と柱穴S P 88から出土している。ほかには時期の判明する遺物はなく、住居の年代も4世紀としておく。住居は東壁付近が攪乱のため失われており確実ではないが、住居が4世紀代であれば、5世紀後半から各地に普及するとされるカマドもまだ存在していなかったと言える。方位の振れもN 23° Eであり、S T 69などの5世紀後半の住居群とは異なる。

S T 77の北西に隣接する川跡S G 1下層の20-37グリッドとその周辺のグリッドからは4世紀代の遺物が多く出土している。また、高杯がまとまって出土しており、川にまつわる祭祀を行った可能性がある。このように住居と川は密接な関係を示している。

「V 遺構」の段でも述べたが、S T 77の掘形には他に見られない特徴がある。すなわち、床面を作るため掘形を埋め戻す途中の面に、溝を掘り砂を埋めるのである。暗渠排水のためとも推定されるが、排水する先はない。どのような性格と目的をもつものかは不明であり、今後の類例の増加を待って検討を要するものである。

出土した遺物から、本遺跡では4世紀初頭から集落が営まれ始めたことがわかる。S T 77は4世紀のどの時期の住居か特定しえないが、調査区東側に広がる集落の本体では、より明確な4世紀初頭の集落が検出されるはずである。S T 69などの5世紀後半の住居にも同じことが言える。川沿いの集落の末端部のみの調査であるため全容はつかめないが、川に捨てられた遺物の種類、量などからは、4世紀初頭から5世紀後半まで内容は均一ではないが、継続した集落が存在したことが明らかとなった。

本遺跡の周辺は沢田遺跡・石田前Y遺跡・花川遺跡・二位田遺跡など弥生時代の遺跡が

多いことで知られているが、弥生時代から古墳時代への移行期の様相を示す遺跡は未だ確認されていない。川跡 S G 1 出土の壺32・37は口縁部内側に櫛描文が施されており、東海系のいわゆるバレス壺の影響を受けていると考えられる。また、32の口縁部外面には棒状浮文・円盤状浮文、36の頸部には刻みが施された突帯が貼り付けられており、やはりバレス壺の影響が認められる。ほかにも甕4～6（A 1 a類）の口縁部に見られるつまみ上げは、畿内の庄内大和形甕の口縁部に類似している。これらの土器は山形盆地南部の古墳時代開始期の状況を考える上で非常に重要な資料である。

2 平安時代

S K 7 および S G 1 上層から 8世紀末から 9世紀初頭の底部切り離しが回転ヘラ切り技法による坏などが出土しているが、ほかの遺物は 9世紀半ば以降、10世紀初頭までのものである。

掘立柱建物はその主軸の方位から大きく二時期に分けられる。主軸が北で西に振れる S B 101 および S A 96 と、主軸が北で東に振れる S B 102・S B 103・S A 107 である。さらに、S B 101 と S A 96 は重複しているので二つの時期に分かれる。同じく、S B 102 と S B 103 は位置が近すぎるため同時に存在したとは考えられないため、これも二つの時期に分けられる。つまり、これら掘立柱建物と柵列は 4 時期の変遷が認められることになる。しかし、時期の判明する遺物が出土しているのは S B 101 の柱穴 S P 35 のみである。いわゆる「赤焼土器」とされるロクロ成形による土師器の坏205が出土しており、10世紀初頭のものと考えられる。S B 101 の上限として捉えられるが、ほかに時期の下る遺物は、土器などを廃棄したと見られる川跡 S G 1 を含めて調査の中では出土しておらず、S B 101 の時期を 10世紀初頭として考えて良いだろう。S A 96 は S B 101 と主軸の振れが近く時期も近いと考えられるが、重複しているため同時には存在しない。また、切り合い関係が見られず、遺物も時期を判別できるものが出土していないため前後関係は不明である。

では S B 102 をはじめとした主軸が北で東に振れる遺構群であるが、これらからも良好な遺物の出土はない上に、明確に前後関係を示すような切り合い関係もなく時期は判然としない。S G 1 をはじめとした周辺の遺構からは遺物は 8世紀末から 9世紀初頭のもの、9世紀第3四半期から第4四半期、そして10世紀初頭のものが見られることからそのいずれかに該当するはずである。これら時期不明の遺構群なども調査区東側に続く遺跡本体部分の調査により判明できるだろう。今後の課題として残る。

次にこれら平安時代の遺構群の性格についてであるが、それを示すような遺物は出土しておらず、これも今後の課題として残ざるを得ない。唯一の文字資料であるヘラ書きを持つ須恵器の坏151も「□人」とまでしか判読できない。ただし、水瓶182のような仏具が出土しており興味深いが、小破片でありこれも遺跡の性格付けには至らない。遺構群の位置は非常に川に近く、川と何らかの関係を持つことも想定できる。

3 今後の課題

先にも今後の課題として挙げたものはあるが、最後にもう一度まとめる。川跡SG1から出土した古墳時代初頭の土器群についてである。これらの遺物がいったいどこからもたらされたものか、そして弥生時代から古墳時代へどのように移行して行くのかという問題である。周辺には弥生時代の遺跡が多い上に、本遺跡のように古墳時代初頭の遺跡もあり、この問題を研究する絶好のフィールドと言える。

引用文献

- 佐藤鎮雄ほか 1976 「二位田遺跡」山形県文化財発掘調査報告書- 昭和48・49年度山形県農林事業関係遺跡- (山形県埋蔵文化財報告書第6集) 山形県教育委員会
- 佐藤禎宏・加藤稔 1982 「第3節 低湿地の開発」山形県史 第一巻 原始・古代・中世編 a 山形県
藤沢敦 1991 「第5章 考察」普沢2号墳 山形市教育委員会 p.170-p.200
- 山口博之・吉田江美子 2000 「石田遺跡 第3次発掘調査説明資料」財団法人山形県埋蔵文化財センター
- 九州近世陶磁器学会 2000 「九州陶磁の編年 - 九州近世陶磁学会10周年記念- a
- 瀬戸市史編纂委員会 1998 「瀬戸市史 陶磁史篇 六a
- パリノ・サーヴェイ(株) 1996 「自然科學分析」宮ノ下遺跡発掘調査報告書 (山形県埋蔵文化財センター調査報告書第32集) p.69-79 財団法人山形県埋蔵文化財センター
- 阿部明彦 1994 「木原遺跡第2次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第8集) p.37 財団法人山形県埋蔵文化財センター

参考文献

- 阿部明彦・水戸弘美 1999 「山形県の古代土器編年」第25回古代城街遺跡検討会資料 a 古代城柵官街遺跡検討会
- 須賀井新人ほか 1994 「今塚遺跡」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第7集) 財団法人山形県埋蔵文化財センター
- 青木勤時 1992 「大和における庄内併行期の櫛の諸相」庄内式土器研究III- 庄内式併行期の土器生産とその移動- a 庄内式土器研究会
- 赤塚次郎 1995 「壺を加飾する」考古学フォーラム7 a 考古学フォーラム
- 浅井和宏 1987 「バレス・スタイル壺小考」マージナルNo.7 a 愛知考古学談話会
- 辻 秀人 1994 「東北南部における古墳出現期の土器編年- その1会津盆地-」東北学院大学論集 歴史学・地理学第26号 a 東北学院大学学術研究所
- 辻 秀人 1995 「東北南部における古墳出現期の土器編年- その2-」東北学院大学論集 歴史学・地理学第27号 a 東北学院大学学術研究所
- 田嶋明人 1986 「考察- 漆町遺跡出土土器の編年的考察」漆町遺跡I a 石川県立埋蔵文化財センター
- 田辺昭三 1981 「須恵器大成」角川書店
- 坂野和信 1999 「東日本における古墳時代中期の土器(1)- 土器の系譜と交流関係-」東国土器研究5号 a 東国土器研究会

表3 土器観察表

番号	器種	器形	分類	出土地点	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	残存状況	調整(外面)
1	須恵器	甕		S G1 20 21G 下層				口縁端部のみ欠損	ロクロ・ケズリ
2	須恵器	甕		S G1 22 38G	(90)			口縁部破片	ロクロ
3	須恵器	壺		S G1		(110)		口縁部破片	ロクロ
4	土師器	甕	A1a	S G1 20 37G 下層	(198)			口縁部	口縁端部ナデ ハケメ・ナデ
5	土師器	甕	A1a	S G1 19 23G 下層	136			口縁部	口縁端部ヨコナデ 口縁部ハケメ
6	土師器	甕	A1a	S G1 19 25G 下層	200			口縁部	ヨコナデ・ハケメ
7	土師器	甕	A1b	S G1 18 25G 下層	(160)			口縁部破片	ハケメ・ナデ
8	土師器	甕	A1b	S G1 16 27G 下層	(140)			口縁部破片	口縁端部ヨコナデ 口縁部・体部ハケメ・ナデ
9	土師器	甕	A1b	S G1 20 37G	(264)			口縁部破片	ハケメ
10	土師器	甕	A2	S G1 22 37G 下層	(180)			口縁部から体部破片	口縁部ヨコナデ 体部ハケメ
11	土師器	甕	A2	S G1 19 24G 下層	(200)			口縁部破片	ハケメ・ナデ
12	土師器	甕	A2	S G1 19 26G 下層	(160)			口縁部破片	口縁端部ヨコナデ 口縁下部・体部ハケメ
13	土師器	甕	A2	17 27G	(194)			口縁部	口縁端部ヨコナデ ハケメ
14	土師器	甕	A2	S G1 21 38G 下層	(328)			頸部破片	ヨコナデ・ハケメ
15	土師器	甕	A2	S G1 下層 18 20G	(192)			口縁部から体部破片	口縁部ヨコナデ
16	土師器	甕	A3	21 37G 遺物包含層	(210)			口縁部破片	口縁部ヨコナデ 体部ハケメ
17	土師器	甕	A3	22 37G 遺物包含層	(184)			口縁部から体部破片	口縁部ヨコナデ 体部ハケメ
18	土師器	甕	A3	S T69 23 29G	(188)			口縁部から体部破片	口縁部ヨコナデ
19	土師器	甕	A3	S G1 19 24G 下層	(140)			口縁部破片	ハケメ・ヨコナデ
20	土師器	甕	A3	S G1 18 20G 下層	(150)			口縁部から体部破片	ハケメ
21	土師器	甕	A3	S G1 17 27G 下層				体部破片	ハケメ
22	土師器	甕	A4a	S X64 30 52G	(190)			口縁部破片	口縁部ヨコナデ 体部ハケメ・ナデ
23	土師器	甕	A4a	S T69 23 38G	(138)			口縁部から頸部	ケズリ・ミガキ
24	土師器	甕	A4a	S G1 18 24G 下層	(178)			底部のみ欠損	口縁部ヨコナデ 体部ハケメ・ナデ
25	土師器	甕	A4a	S G1 16 26G 下層	(206)			口縁部破片	口縁部ヨコナデ 体部ハケメ
26	土師器	甕	A4a	試掘トレンチN12 S D12	70			口縁端部のみ欠損	口縁部ヨコナデ ハケメ
27	土師器	甕	A4a	S G1 下層	(178)			口縁部から体部破片	口縁部ハケメ・ヨコナデ 体部ハケメ
28	土師器	甕	A4a	試掘トレンチN12 S D12	175			上半部	口縁部ハケメ・ヨコナデ 体部ハケメ
29	土師器	甕	A4a	S T69 23 28G	217			口縁部破片	口縁部ヨコナデ 体部ハケメ
30	土師器	甕	A4a	S G1 18 24G 下層	190			上半部	口縁部ハケメ・ヨコナデ 体部ハケメ
31	土師器	甕	A4b	S P84 21 27G	(128)			口縁部から体部破片	口縁部ヨコナデ 体部ハケメ
32	土師器	壺	B1	S G1 19 23-19 25G 下層				口縁部破片	ハケメ
33	土師器	壺	B1	S G1 18 27G 下層	(140)			口縁部破片	ハケメ
34	土師器	壺	B1	S P68				頸部破片	ハケメ
35	土師器	壺	B1	S G1 22 38G 下層	(340)			口縁部破片	
36	土師器	壺	B1	S G1 21 37G 下層				頸部から体部破片	ハケメ
37	土師器	壺	B1	S G1 20 23G 上層				口縁部破片	ハケメ

調整(内面)	底部	胎土	焼成	色調	備考
丸底	繊砂混	硬	灰		
口クロ	繊砂混	硬	灰		
口クロ	繊砂混	硬	灰		
ハケメ・ナデ	繊砂混	良	にぶい褐		
口縁端部ヨコナデ 口縁部ハケメ	繊砂混	良	褐色		
口縁端部ヨコナデ ハケメ	繊砂混	良	にぶい黄橙		
ハケメ・ナデ	繊砂混	良	にぶい褐		
口縁部ハケメ・ナデ 体部ハケメ・ナデ	繊砂混	良	にぶい黄橙		
ハケメ	粗砂混	良	にぶい黄橙		
口縁部ヨコナデ 体部ハケメ	繊砂混	良	にぶい黄橙		
ハケメ・ナデ	繊砂混	良	にぶい黄橙		
口縁部ハケメ・ヨコナデ 体部ナデ	繊砂混	良	にぶい黄橙		
口縁端部ヨコナデ ハケメ	繊砂混	良	浅黄橙		
ハケメ	粗砂混	良	にぶい黄橙		
口縁部ヨコナデ	繊砂混	良	にぶい黄橙		
口縁部ヨコナデ	繊砂混	良	にぶい黄橙		
口縁部ヨコナデ	繊砂混	良	にぶい黄橙		
口縁部ヨコナデ	粗砂混	良	にぶい黄橙		
ハケメ	繊砂混	良	にぶい黄橙		
ハケメ	繊砂混	良	にぶい黄橙		
ナデ	粗砂混	良	浅黄橙		
口縁部ヨコナデ 体部ナデ	繊砂混	良	にぶい黄橙	内外面摩滅・剥離	
口縁部ミガキ 体部ナデ	細密	不良	灰白		
口縁部ヨコナデ 体部ナデ	粗砂混	良	にぶい黄橙		
口縁部ヨコナデ	粗砂混	良	にぶい黄橙		
口縁部ヨコナデ 平底	粗砂混	良	にぶい黄橙	試掘調査資料	
口縁部ハケメ・ヨコナデ 体部ヘラナデ	繊砂混	良	にぶい黄橙		
口縁部ハケメ・ヨコナデ 体部ナデ	粗砂混	良	にぶい黄橙	試掘調査資料	
口縁端部ヨコナデ 口縁部ハケメ・ナデ 体部ナデ	粗砂混	良	にぶい黄橙		
口縁部ハケメ・ナデ 体部ナデ	粗砂混	良	にぶい褐		
口縁部ヨコナデ 体部ハケメ	繊砂混	良	にぶい橙		
	繊砂混	良	にぶい黄橙	口縁部装飾(棒状・円盤状浮文) 内面に櫛描文・竹管文	
ハケメ	細密	良	橙		
ハケメ	繊砂混	良	にぶい橙	頸部突帶	
	繊砂混	良	褐色	口縁部装飾(棒状浮文)	
ハケメ	粗砂混	良	にぶい黄橙	頸部突帶	
	粗砂混	不良	にぶい黄橙	内面に櫛描文	

遺物觀察表

番号	器種	器形	分類	出土地点	口径	底径 (mm)	器高 (mm)	残存状況	調整(外面)
38	土師器	壺	B1	S G1 20 22G 下層	170			口縁部から頸部	口縁部ヨコナデ 頸部ハケメ
39	土師器	壺	B2a	S G1 18 25G 下層	170			口縁部	口縁端部ヨコナデ 口縁部ハケメ
40	土師器	壺	B2a	S G1 18 27G 下層	192			口縁部	口縁上部ヨコナデ 下部ハケメ
41	土師器	壺	B2b	S G1 21 38G 下層 (280)				口縁部破片	口縁部上部ナデ・下部ハケメ
42	土師器	壺	B3a	S G1 26 48G 下層	160			口縁部	口縁端部ハケメ・ナデ 口縁部ハケメ
43	土師器	壺	B3a	S G1 19 23G 下層 (166)				口縁部破片	ハケメ
44	土師器	壺	B3a	S G1 22 37G 下層 (170)				口縁部破片	ヨコナデ
45	土師器	壺	B3a	S G1 17 27G 下層 (164)				口縁部破片	ハケメ
46	土師器	壺	B3b	S G1 20 22G 下層	164			口縁部	口縁端部ヨコナデ 口縁部ハケメ
47	土師器	壺	B3b	S G1 19 25G 下層 (150)				口縁部破片	口縁端部ヨコナデ 口縁部ハケメ
48	土師器	壺	B3b	S G1 19 24G 下層 (170)				口縁部破片	口縁端部ヨコナデ 口縁部ハケメ
49	土師器	壺	B3c	S G1 18 25G 下層 (164)				口縁部破片	ハケメ
50	土師器	壺	B4	S G1 20 38G 下層 (160)				口縁部	口唇部ヨコナデ ハケメ・ヘラナデ
51	土師器	壺	B5	S G1 22 38G 下層 (174)				口縁部	上部ヨコナデ 下部ハケメ
52	土師器	壺	B6	S X64 30 54G	(170)			口縁部破片	ヨコナデ
53	土師器	壺	B6	22 37G 遺物包含層	(170)			口縁部破片	ハケメ・ヨコナデ
54	土師器	壺	B6	不明	(140)			口縁部破片	口縁端部ヨコナデ 口縁部ナデ・ミガキ
55	土師器	壺	B6	S G1 22 38G 下層 (140)				口縁部破片	口縁端部ヨコナデ ハケメ
56	土師器	壺	B6	S X64 30 52G	(154)			頸部破片	
57	土師器	橢壺類	C1	S G1 18 20G 下層	74			底部から体部破片	ハケメ
58	土師器	橢壺類	C1	S G1 19 20G 下層	65			底部から体部破片	ナデ
59	土師器	橢壺類	C1	S G1 19 20G 下層 (70)				下半部	ハケメ
60	土師器	橢壺類	C2	S G1 18 26G 下層	62			底部	体部ヘラナデ 底部ナデ
61	土師器	橢壺類	C2	S G1 19 26G 下層	58			底部	ハケメ・ナデ 底部ハケメ
62	土師器	橢壺類	C2	S G1 20 23G 下層	70			底部	ハケメ
63	土師器	橢壺類	C3a	S G1 20 22G 下層	54			底部から体部	ハケメ
64	土師器	橢壺類	C3a	S G1 20 23G 下層	58			下半部	ハケメ
65	土師器	橢壺類	C3a	S G1 20 23G 下層	64			下半部破片	ハケメ・ナデ
66	土師器	橢壺類	C3a	S G1 20 22G 下層	54			底部	ハケメ
67	土師器	橢壺類	C3a	S G1 21 38G 下層	64			底部から体部	ハケメ
68	土師器	橢壺類	C3a	S G1 20 37G 下層	62			底部から体部破片	体部ハケメ 底部ナデもしくは布痕
69	土師器	橢壺類	C3b	S G1 19 27G 下層	52			底部のみ	ナデ
70	土師器	橢壺類	C3b	S T69 23 28G	62			底部	ケズリ・ナデ
71	土師器	橢壺類	C3c	26 48G 遺物包含層	64				ハケメ
72	土師器	橢壺類	C3c	S G1 21 37G 下層	60			下半部	ヘラナデ
73	土師器	橢壺類	C3c	S G1 20 37G 下層	56			底部	ハケメ・ナデ
74	土師器	橢壺類	C3c	S G1 21 37G 下層	70			底部	ハケメ
75	土師器	橢壺類	C3c	S T69 23 28G	56			底部から体部	ハケメ・ミガキ

調整(内面)	底部	胎土	焼成	色調	備考
口縁部ヨコナデ 頸部ハケメ		繊砂混	良	褐灰	
口縁端部ヨコナデ 口縁部ハケメ		繊砂混	良	にぶい黄橙	頸部突帯
ハケメ		粗砂混	不良	にぶい黄橙	頸部突帯
口縁端部ヨコナデ 口縁部ハケメ・ナデ		粗砂混	不良	にぶい黄橙	頸部突帯 固上復元
上部ハケメ・ナデ 下部ハケメ		繊砂混	良	浅黄橙	
ヨコナデ		繊砂混	良	灰黄褐	
ヨコナデ		緻密	良	にぶい黄橙	
ハケメ		粗砂混	不良	浅黄橙	
ハケメ		繊砂混	良	褐灰	
口縁端部ヨコナデ 口縁部ハケメ		繊砂混	良	褐灰	
ハケメ		繊砂混	良	褐灰	
ハケメ		粗砂混	不良	にぶい黄橙	
口脣部ヨコナデ ハケメ・ヘラナデ		繊砂混	良	にぶい黄橙	
上部ヨコナデ 下部ナデ		繊砂混	良	にぶい黄橙	頸部突帯
ヨコナデ		粗砂混	良	浅黄橙	
ヨコナデ		繊砂混	良	にぶい黄橙	
口縁端部ヨコナデ 口縁部ミガキ		緻密	良	にぶい黄橙	
ハケメ		緻密	良	褐灰	
ミガキ		粗砂混	良	にぶい黄橙	外面赤彩
ナデ	中央の窪む平底	粗砂混	良	にぶい黄橙	
ハケメ・ナデ	中央の窪む平底	粗砂混	良	にぶい黄橙	
ナデ・ヘラナデ	平底	粗砂混	良	にぶい黄褐	
ハケメ	平底	粗砂混	良	褐灰	
ナデ	平底	繊砂混	良	浅黄橙	
ナデ	平底	繊砂混	良	にぶい黄橙	
ハケメ	木葉瓶 中央の窪む平底	繊砂混	良	褐灰	
ハケメ	中央の窪む平底	繊砂混	良	にぶい黄橙	
ハケメ・ヘラナデ	中央の窪む平底	粗砂混	良	にぶい黄橙	輪積み痕
ハケメ	中央の窪む平底	繊砂混	良	にぶい培	
ハケメ	中央の窪む平底	粗砂混	良	灰黄褐	
ハケメ	中央の窪む平底	粗砂混	良	灰黄褐	
ナデ	平底	粗砂混	良	灰黄褐	
ヘラナデ	中央の窪む平底	粗砂混	良	灰黄褐	
ヘラナデ	平底	繊砂混	良	浅黄橙	
ハケメ	中央の窪む平底	粗砂混	不良	にぶい黄橙	
ハケメ	平底	粗砂混	良	にぶい黄橙	
ハケメ	中央の窪む平底	粗砂混	良	灰黄褐	
ミガキ	平底	緻密	良	にぶい黄橙	

遺物觀察表

番号	器種	器形	分類	出土地点	口径	底径 (mm)	器高	残存状況	調整(外面)
76	土師器	甕壺類	C3c	S T69 23 28G		76		底部	
77	土師器	甕壺類	C3d	S G1 18 27G 下層		88		底部	ナデ
78	土師器	甕壺類	C3d	S G1 20 23G 下層		77		下半部破片	ナデ
79	土師器	甕壺類	C4	S G1 18 20G 下層		50		底部	ハケメ・ナデ
80	土師器	甕壺類	C4	S G1 19 20G 下層		31.5		底部	ハケメ・ミガキ
81	土師器	甕壺類	C4	S T77 24 30G		40		底部	ハケメ・ナデ
82	土師器	台付甕	D1	S G1 23 38G 下層	(120)			台部破片	ナデ
83	土師器	台付甕	D1	S G1 18 26G 下層	(104)			台部破片	ハケメ
84	土師器	台付甕	D1	S G1 18 26G 下層		82		台部	ハケメ
85	土師器	台付甕	D2	S G1 27 46G 下層				台部破片	摩滅のため不明
86	土師器	坏	E1	S G1 29 45G 下層	152	28	60	ほぼ完形	口縁部ヨコナデ 体部ナデ ヘラナデ・ヘラミガキ
87	土師器	坏	E1	S P81	(158)		70	ほぼ完形	口縁部ヨコナデ・ミガキ 体部ミガキ 底部ケズリ
88	土師器	坏	E1	S T83 床面				全体の2/3	口縁部ヨコナデ 体部ミガキ 底部ケズリ
89	土師器	坏	E2	S G1 28 46G 下層	(160)		50	全体の2/3	口縁部ヨコナデ 体部ハケメ・ミガキ
90	土師器	坏	E2	21 32 遺物包含層	(164)	46	67	全体の2/3	摩滅のため不明
91	土師器	坏	E	S G1 22 38G		38		底部	体部ヘラケズリ・ミガキ 底部ハケメ
92	土師器	鉢	F	S G1 18 26G 下層	84	46	42	ほぼ完形	上部2/3ハケメ 下部1/3ナデ
93	土師器	鉢	F	S G1 19 25G 下層	(162)	42	50	全体の2/3	口縁部ヨコナデ 体部・底部ハケメ
94	土師器	瓶	G	21 38G 遺物包含層	(23)			口縁部破片	ハケメ
95	土師器	瓶	G	S G1 22 28G				体部破片	ハケメ
96	土師器	瓶	G	S G1 19 23G 下層		50		底部から体部	ケズリ・ナデ
97	土師器	瓶	G	S X64 30 52G		47		底部	ハケメ・ナデ
98	土師器	高坏	H1a	S G1 20 36G 下層	182			複部欠損	ミガキ
99	土師器	高坏	H1a	S G1 20 37G 下層	170			複部欠損	ミガキ
100	土師器	高坏	H1b	S G1 17 27G 下層				脚部	ハケメ・ミガキ
101	土師器	高坏	H2a	S G1 21 22G 上層				脚部	ミガキ
102	土師器	高坏	H2a	S G1 26 47G 下層				脚部	ミガキ
103	土師器	高坏	H2b	S G1 18 26G 下層				脚部	ミガキ
104	土師器	高坏	H3	S G1 20 37G 下層				脚部	ミガキ
105	土師器	高坏	H4	S G1 18 26G 下層				坏部下半から脚部	ハケメ
106	土師器	高坏	H4	S G1 20 36G 下層				脚部	ハケメ
107	土師器	高坏	H5	S G1 20 37G 下層				脚部	ミガキ
108	土師器	高坏	H5	S G1 28 52G 下層				脚部	ミガキ
109	土師器	高坏	H5	S G1 19 24G 下層				脚部	ミガキ
110	土師器	高坏	H6	S G1 27 44G 下層				脚部	ミガキ
111	土師器	高坏	H7a	S G1 20 37G	(120)			脚部下半	ハケメ
112	土師器	高坏	H7a	S G1 20 37G 下層				脚部	ケズリ・ハケメ・ミガキ
113	土師器	高坏	H7b	S G1 20 37G 下層				脚部	ミガキ

調整(内面)	底部	胎土	焼成	色調	備考
ヘラナデ	平底	粗砂混	不良	にぶい黄橙	
粗いハケメ	中央の窪む平底	粗砂混	不良	浅黄橙	
ハケメ	中央の窪む平底	粗砂混	良	灰黄褐	
ヘラナデ	中央の窪む平底	粗砂混	良	にぶい黄橙	
ナデ	平底	粗砂混	良	にぶい黄橙	
ハケメ	中央の窪む平底	粗砂混	良	灰白	
ハケメ・ナデ		粗砂混	良	浅黄橙	
ハケメ・ナデ		粗砂混	良	浅黄橙	
上部ナデ 下部上半ナデ・下半ハケメ		粗砂混	良	灰黄褐	
上部ハケメ・ナデ 下部ナデ		粗砂混	不良	にぶい黄橙	
ナデ・タテヘラミガキ	くぼみ底	緻密	良	にぶい黄橙	口縁部に輪積み痕残る
口縁部ヨコナデ・ミガキ 体部ミガキ	丸底	緻密	良	にぶい黄橙	
ハケメ・ミガキ	丸底	緻密	良	浅黄橙	
ミガキ	丸底	緻密	良	にぶい黄橙	
摩滅のため不明	くぼみ底	粗砂混	不良	にぶい黄橙	内外面摩滅
ヘラミガキ	くぼみ底	緻密	良	にぶい黄橙	
ナデ	平底	粗砂混	良	浅黄橙	
口縁部ヨコナデ 体部ハケメ	平底	粗砂混	良	にぶい黄橙	
ハケメ		緻密	不良	にぶい黄橙	内外面摩滅
ハケメ		粗砂混	良	にぶい黄橙	取手部分剥落
ハケメ・ナデ	単孔	粗砂混	良	にぶい黄橙	
ハケメ・ナデ	単孔	粗砂混	良	浅黄橙	
环部ミガキ 福部ナデ		粗砂混	良	橙	全体摩滅・剥落
环部ミガキ		粗砂混	良	橙	内外面摩滅・剥落
ヘラナデ		緻密	不良	にぶい黄橙	
		緻密	不良	橙	外面摩滅
		粗砂混	良	暗灰黄	
		粗砂混	良	赤褐	
ナデ		緻密	良	にぶい褐	
ナデ		粗砂混	良	にぶい黄橙	
ナデ		粗砂混	良	にぶい黄橙	外面赤彩
		粗砂混	良	橙	
ナデ		粗砂混	良	浅黄橙	
ナデ		粗砂混	良	にぶい褐	
ナデ		緻密	良	にぶい橙	内外面摩滅 3孔
ナデ		粗砂混	良	にぶい黄橙	
ナデ		緻密	良	にぶい橙	
环部ハケメ 脚部ナデ		粗砂混	良	にぶい赤褐	赤彩

遺物觀察表

番号	器種	器形	分類	出土地点	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	残存状況	調整(外面)
114	土師器	高坏	H7b	S G1 20 37G 下層				脚部	タテ・ヨコミガキ
115	土師器	高坏	H7b	S G1 20 37G 下層				脚部	脚部ミガキ 福部ハケメ・ミガキ
116	土師器	高坏	H7	S G1 17 27G 下層 (156)				坏部破片	ハケメ・ヘラミガキ
117	土師器	高坏	H8a	S G1		(132)		脚部	福部タテヘラミガキ 福端部ヨコヘラミガキ
118	土師器	高坏	H8a	S G1				脚部	タテヘラミガキ
119	土師器	高坏	H8b	S G1 20 23G 下層				福部	ハケメ・ナデ
120	土師器	高坏	H9a	S G1 20 23G 下層				福部欠損	坏部ハケメ 脚部ミガキ
121	土師器	高坏	H9b	S G1 23 42G				皿端部・福部欠損	ミガキ
122	土師器	高坏	H10	S G1 16 27-17 27G 下層	178			坏部	ハケメ・ヘラミガキ
123	土師器	器台	I1a	S G1 17 27G 下層				皿端部・福部欠損	ミガキ
124	土師器	器台	I1b	S G1 20 36G 下層				皿端部・福部欠損	ハケメ・ヘラミガキ ヘラミガキ
125	土師器	器台	I1b	S G1 19 25G 下層				皿端部・福部欠損	ミガキ
126	土師器	器台	I2a	S G1 27 47G 下層		(90)		全体の1/2	ヘラミガキ
127	土師器	器台	I2b	S G1 17 26G 下層		68		福部	ハケメ
128	土師器	器台	I2b	S G1 27 46G 下層		(78)		全体の1/3	ヘラミガキ
129	土師器	丸底壺	J1	S G1 17 27G 下層		36		下半部	ヘラミガキ
130	土師器	丸底壺	J2	S G1 20 37G 下層		30		下半部	ヘラケズリ・ナデ
131	土師器	丸底壺	J2	S G1 18 27G 下層				上半部	ハケメ・ヘラミガキ
132	土師器	丸底壺	J3	S G1 19 26G 下層		36		下半部	ケズリ・ナデ 下部ケズリ・ナデ・ミガキ
133	土師器	丸底壺	J4	S G1 17 26G 下層 (107)	34	92		ほぼ完形	ヘラミガキ
134	土師器	丸底壺	J	17 24G 遺物包含層		30		底部	ハケメ・ミガキ
135	土師器	丸底壺	J	S G1 18 26G 下層		28		下半部	ハケメ・ナデ
136	土師器	小型土器	K1a	S G1 20 21G 下層	98	16	59	口縁端部ヨコナデ ケズリ・組いミガキ	
137	土師器	小型土器	K1a	S P88		99	26	57	全体の1/2
138	土師器	小型土器	K1a	S T77 23 30G		20		下半部	ミガキ
139	土師器	小型土器	K1a	S G1 19 25G 下層		22		下半部	摩滅のため不明
140	土師器	小型土器	K1a	S G1 18 20G 下層		(20)		下半部	ナデ・ヘラミガキ
141	土師器	小型土器	K1a	S G1 17 27G 下層		16		下半部	ナデ
142	土師器	小型土器	K1b	S G1 17 27G 下層		29		下半部	ケズリ・ミガキ
143	土師器	小型土器	K1c	S G1 17 27G 下層		26		底部から体部	摩滅のため不明
144	土師器	小型土器	K1d	S G1 16 25G 下層		(72)		下半部破片	
145	土師器	小型土器	K2	S G1 16 25G 下層				全体の1/2	
146	土師器	小型土器	K2	S P14				体部破片	
147	手づくね 土器	壺	L	S G1 28 47G	(113)	46		口縁部	
148	須恵器	坏	S K7		148	77	44	口縁部	ロクロ
149	須恵器	坏	S K7		(146)	81	31	全体の1/2	ロクロ
150	須恵器	坏	S G1 22 38G		(60)			底部破片	ロクロ
151	須恵器	坏	S G1 18 24G 下層	(138)	(60)	46		破片	ロクロ

調整(内面)	底部	胎土	焼成	色調	備考
ナデ 褐端部ヨコナデ		緻密	良	にぶい黄橙	坏部と脚部の裏目が剥離
坏部ミガキ 褐部ナデ 褐端部ヨコナデ		緻密	良	にぶい黄橙	
ヘラミガキ		緻密	良	にぶい黄橙	内面剥落
指押さえ ハケメ・ナデ		織砂混	良	にぶい黄橙	
指押さえ ナデ		織砂混	良	にぶい黄橙	
		織砂混	不良	橙	内外面摩滅・剥落
坏部ナデ 脚部ナデ		織砂混	不良	橙	内外面摩滅・剥落
		緻密	不良	橙	
ヘラミガキ		緻密	良	浅黄橙	
皿部ミガキ 脚部ナデ 褐部ハケメ		織砂混	良	浅黄	
摩滅・剥落のため不明		織砂混	良	橙	内面摩滅・剥落
摩滅のため不明		織砂混	不良	橙	内外面摩滅
ナデ		緻密	良	にぶい黄橙	
		粗砂混	良	にぶい黄橙	
ミガキ		緻密	良	にぶい黄橙	
ナデ 下部ハケメ	くぼみ底	織砂混	不良	明赤褐	外面剥落多 内面に輪込み痕
ナデ	くぼみ底	織砂混	良	橙	
ナデ		緻密	良	にぶい黄橙	
ナデ	平底	織砂混	堅	にぶい黄橙	
ヘラミガキ	くぼみ底	緻密	良	にぶい黄橙	口縁部内面・外面全体赤彩
ナデ	くぼみ底	織砂混	良	にぶい黄橙	
ナデ	くぼみ底	粗砂混	良	灰白	
口縁端部ヨコナデ ミガキ	くぼみ底	織砂混	堅	にぶい黄橙	
ハケメ・ミガキ	くぼみ底	緻密	良	にぶい黄橙	
ナデ	平底	緻密	良	橙	
摩滅のため不明	くぼみ底	緻密	良	明赤褐	内外面摩滅
ナデ・ヘラミガキ	平底	緻密	良	にぶい黄橙	内外面摩滅 内外面赤彩
ナデ	くぼみ底	緻密	良	橙	
ナデ	平底	緻密	良	橙	
摩滅のため不明	くぼみ底	緻密	良	橙	内外面摩滅・剥落
	平底	緻密	良	にぶい黄橙	
ハケメ		織砂混	良	橙	
		織砂混	不良	橙	内外面摩滅
	丸底	緻密	不良	灰白	内外面摩滅・剥離
ロクロ	ヘラ切り	粗砂混	良	灰	
ロクロ	ヘラ切り	織砂混	硬	灰	海綿骨針 少
ロクロ	回転系切り	緻密	硬	灰	底部にヘラ書き
ロクロ	回転系切り	粗砂混	硬	灰	内面にヘラガキ

遺物観察表

番号	器種	器形	分類	出土地点	口径 (mm)	底径 (mm)	器高	残存状況	調整(外面)
152	須恵器	坏		S G1 22 38G	(148)	(70)	44	破片	ロクロ
153	須恵器	坏		S G1 22 28G	(134)	58	45	全体の1/3	ロクロ
154	須恵器	坏		S X63 21 29G	(130)	76		全体の1/2	ロクロ
155	須恵器	坏		S G1 19 22G 上層	(136)			体部破片	ロクロ
156	須恵器	坏	不明		(118)			体部破片	ロクロ
157	須恵器	坏		S G1 27 43G	(140)			体部破片	ロクロ
158	須恵器	坏		S X4 21 28G	(140)	(58)	49	全体の1/3	ロクロ
159	須恵器	坏		S G1 19 22G 上層	(136)			体部破片	ロクロ
160	須恵器	坏		S G1 19 24G 上層	(140)			体部	ロクロ
161	須恵器	坏		S G1 19 24G 上層	(140)			体部破片	ロクロ
162	須恵器	坏		S G1 22 38G	(140)	60	48	底部から 体部	ロクロ
163	須恵器	坏		S G1 18 24G 上層	(138)			体部破片	ロクロ
164	須恵器	坏		18 26G 遺物包含層	(120)			体部破片	ロクロ
165	須恵器	高台付坏		S G1 20 20G 上層	(134)	(82)	70	全体の1/3	ロクロ
166	須恵器	高台付坏	不明		(68)			底部	ロクロ
167	須恵器	高台付坏	攢乱	19 32G		(90)		底部破片	
168	須恵器	蓋	表探		(160)			口縁部破片	ロクロ
169	須恵器	蓋		S G1 19 34G 上層				天井部破片	ロクロ
170	須恵器	蓋		22 33G 遺物包含層				天井部	ロクロ
171	須恵器	蓋		S G1 25 42G	(144)			口縁部破片	ロクロ
172	須恵器	蓋		S X4 21 29G	(160)			口縁部破片	ロクロ
173	須恵器	甕		S G1 21 34G	(180)			口縁部破片	ロクロ
174	須恵器	甕		S G1 20 21G 上層	(188)			口縁部破片	ロクロ
175	須恵器	甕		15 23G 遺物包含層				口縁部破片	ロクロ
176	須恵器	甕		S P23 22 31G				口縁部破片	ロクロ
177	須恵器	甕		S X4 21 29G	116	(76)	146	ほぼ完形	ロクロ・ケズリ
178	須恵器	甕	攢乱					体部破片	ロクロ
179	須恵器	甕		15 21G 遺物包含層	(170)			底部破片	ロクロ・ケズリ・タタキ
180	須恵器	壺		22 30G 遺物包含層	(116)			口縁部破片	ロクロ
181	須恵器	壺		S G1 22 38G	(100)			口縁部破片	ロクロ
182	須恵器	水瓶		S G1 16 25G 上層				体部破片	ロクロ
183	土師器	甕		21 34G 遺物包含層	204	86	156	全体の2/3	ケズリ・ヘラナデ
184	土師器	甕		S K7 22 27-22 28G	(119)			口縁部ヨコナデ 体部ハケメ	
185	土師器	甕		S G1 22 38G		(70)		底部破片	ハケメ
186	土師器	甕		23 34G 遺物包含層	(70)			体部破片	摩滅のため不明
187	土師器	甕		S G1 20 22G	(70)			底部	ハケメ
188	土師器	甕		S G1 19 24G 上層	(90)			体部破片	ハケメ
189	土師器	甕		S G1 22 38G	(100)			体部破片	ハケメ

調整(内面)	底部	胎土	焼成	色調	備考
ロクロ	回転糸切り	繊砂混	硬	青灰	海綿骨針 多
ロクロ	回転糸切り	粗砂混	硬	灰	海綿骨針 少
ロクロ	回転糸切り	粗砂混	良	灰	海綿骨針 少
ロクロ		粗砂混	良	灰白	
ロクロ		細密	硬	灰	海綿骨針 少
ロクロ		粗砂混	良	灰	
ロクロ	回転糸切り	繊砂混	良	灰	海綿骨針 少
ロクロ		粗砂混	良	灰	海綿骨針 多
ロクロ		粗砂混	不良	灰白	
ロクロ		繊砂混	良	灰	海綿骨針 多
ロクロ	回転糸切り	粗砂混	良	灰	海綿骨針 少
ロクロ		粗砂混	不良	灰白	
ロクロ		細密	硬	灰	
ロクロ	回転糸切り	粗砂混	硬	灰	海綿骨針 少
ロクロ	回転糸切り	繊砂混	良	灰	
	回転糸切り	繊砂混	硬	灰	海綿骨針 少
ロクロ		細密	良	灰	
ロクロ		繊砂混	硬	灰	海綿骨針 やや多
ロクロ		細密	硬	灰	海綿骨針 少
ロクロ		粗砂混	硬	灰	海綿骨針 多
ロクロ		繊砂混	良	灰	
ロクロ		繊砂混	良	灰白	
ロクロ		粗砂混	良	灰	
ロクロ		粗砂混	硬	灰	
ロクロ		粗砂混	硬	灰	海綿骨針 少
ロクロ		粗砂混	良	灰白	
ロクロ		粗砂混	良	灰	
ロクロ		粗砂混	硬	灰	
ロクロ		粗砂混	硬	灰	海綿骨針 少
ロクロ		粗砂混	良	灰白	
ロクロ		粗砂混	良	灰	
ロクロ		粗砂混	硬	灰	
ロクロ		粗砂混	硬	灰	海綿骨針 少
ロクロ		粗砂混	良	灰白	
ロクロ		粗砂混	良	灰	
ロクロ		粗砂混	硬	灰	
ロクロ		粗砂混	硬	灰	海綿骨針 少
ロクロ		粗砂混	良	灰白	
ロクロ		粗砂混	良	灰	
ミガキ	網代痕	粗砂混	良	浅黄橙	内面黒色処理
口縁部ヨコナデ		粗砂混	良	にぶい黄褐色	
	網代痕	繊砂混	良	にぶい橙	内面に輪積み痕
ハケメ	網代痕	繊砂混	良	にぶい橙	
	木葉痕	繊砂混	良	褐	
	網代痕	繊砂混	良	灰黄褐	
ハケメ	網代痕	粗砂混	良	にぶい黄橙	

遺物観察表

番号	器種	器形	分類	出土地点	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	残存状況	調整(外面)
190	土師器	甕		22 35 G 遺物包含層				頸部破片	頸部ヨコナデ 体部ハケメ
191	土師器	甕		21 34 G 遺物包含層				体部破片	ハケメ
192	土師器	甕		22 34 G 遺物包含層	(60)			底部破片	ハケメ
193	土師器	甕		S K7 22 28 G				口縁部破片	
194	土師器	高台付坏		S G1 19 24 G 上層	(60)			底部破片	ロクロ
195	土師器	高台付坏		S G1 19 23 G 上層	62			底部	ロクロ
196	土師器	高台付坏		22 34 G 遺物包含層	(63)			底部	ロクロ
197	土師器	坏		S P20 25 34-26 34 G	(140)	54	52	底部から体部破片	ロクロ
198	土師器	坏		S G1 19 23 G 上層	124			上部破片	ロクロ
199	土師器	坏		S G1 19 23 G 上層	132			上部破片	ロクロ
200	土師器	坏		S G1 19 23 G 上層	50			底部から体部	ロクロ
201	土師器	坏		S G1 18 20 G 上層	53			全体の1/3	ロクロ
202	土師器	坏		S G1 19 23 G 上層	50			底部	ロクロ
203	土師器	坏		22 33 G 遺物包含層	(80)			底部破片	ロクロ
204	土師器	坏		S G1 19 25 G 上層	(56)			底部	ロクロ
205	土師器	坏		S P35 19 31 G	(60)			底部破片	ロクロ
206	土師器	坏		S G1 19 20 G 上層	(50)			底部破片	ロクロ
207	縄文土器	深鉢		21 38 G 遺物包含層					
208	陶器 (肥前)	皿		S X10 23 27 G	(43)			底部破片	灰釉 下半部無釉
209	陶器 (志野)	菊皿		塗土	(103)	78		全体の1/4	長石釉
210	陶器 (肥前)	擂鉢		S G1	(84)			底部破片	ロクロ+ナデ

表4 石器・石製品・礫観察表

番号	種別	出土地点	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	石材	備考
211	勾玉形石製模造品	22 34 G 遺物包含層	41.5	2.5	3.5	粘板岩	上部に穿孔、背部に溝
212	礫	S X64 31-54 G	33.5	10.5	8.8		周囲に幅1.5~2cmの擦痕
213	礫	S T69 23-28 G	15.0	9.5	8.9		カマド内で支脚として利用、強く被熱
214	凹石	S X64 31-54 G	12.9	7.1	3.6	砂岩	表2ヶ所、裏3ヶ所の凹部

表5 木製品観察表

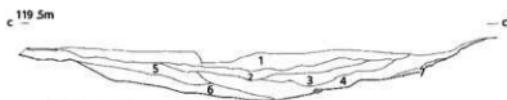
番号	種別	出土地点	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	樹種	備考
215	柱材	S P14	435	255	216	コナラ属コナラ亜属コナラ節	幅1.5~2cmの工具痕
216	柱材	S P13	131	174	166	コナラ属コナラ亜属コナラ節	218-219-220上に載る
217	柱材	S P52	121	102	64	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
218	礎板	S P13	310	112	65	コナラ属コナラ亜属コナラ節	廃材を分割したものを利用
219	礎板	S P13	328	123	68	コナラ属コナラ亜属コナラ節	廃材を分割したものを利用
220	礎板	S P13	273	80	29	コナラ属コナラ亜属コナラ節	廃材を分割したものを利用
221	杭	S G1 下層 26-48 G	440	116	124	マツ属複数管束亞属	下端部が炭化
222	杭	S G1 下層 26-48 G	509	110	109	マツ属複数管束亞属	下端部が炭化

調整(内面)	底部	胎土	焼成	色調	備考
口縁部ハケメ 体部ヘラナデ		繊砂混	良	にぶい黄橙	191・192と同一個体の可能性あり
ハケメ		繊砂混	良	にぶい黄橙	190・192同一個体の可能性あり
ナデ	網代痕	繊砂混	良	にぶい黄橙	190・191と同一個体の可能性あり
		繊砂混	不良	にぶい橙	内面に輪様み痕
ロクロ		緻密	不良	にぶい橙	内面黒色処理 内外面摩滅 赤燒土器
ロクロ		緻密	不良	橙	内面黒色処理 内外面摩滅 赤燒土器
ロクロ		繊砂混	不良	橙	内外面摩滅 赤燒土器
ロクロ	回転糸切り	繊砂混	良	灰白	海綿骨針少 赤燒土器
ロクロ		繊砂混	良	にぶい橙	赤燒土器
ロクロ		繊砂混	良	にぶい橙	赤燒土器
ロクロ	回転糸切り	繊砂混	良	にぶい橙	赤燒土器
ロクロ	回転糸切り	緻密	良	にぶい橙	赤燒土器
ロクロ	回転糸切り	繊砂混	良	にぶい橙	赤燒土器
ロクロ	回転糸切り	繊砂混	良	にぶい赤褐	赤燒土器
ロクロ	回転糸切り	緻密	良	にぶい褐	赤燒土器
ロクロ	回転糸切り	緻密	良	浅黄橙	赤燒土器
ロクロ	回転糸切り	繊砂混	良	橙	赤燒土器
					織文土器
灰釉					疊付に糸切り痕が残る
長石釉		無釉			見込みに円錐ビン痕
9条1単位の跡目	回転糸切り				底部脇に指跡痕 内面に灰釉の釉溝

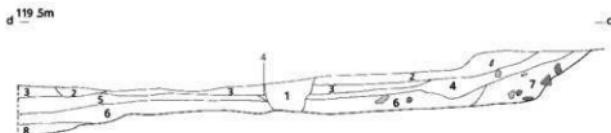


調査説明会

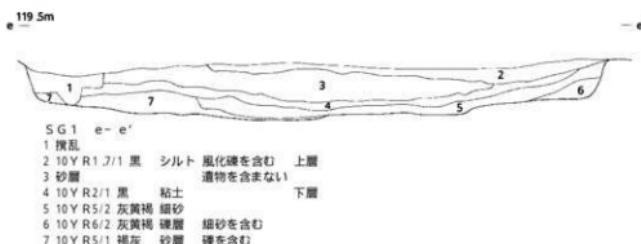
透構実測図



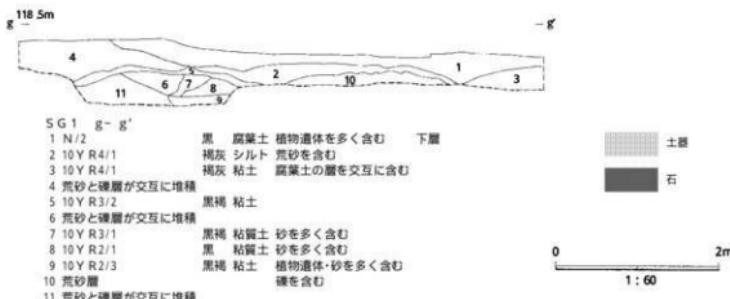
SG 1 c-c'			
1	10Y R2/1	黒	シルト
2	10Y R1.7/1	黒	シルト
3	10Y R2/1	黒	粘質シルト 底部に炭化物を含む
4	10Y R2/1	黒	粘質土
5	10Y R2/1	黒	砂質土 この層まで遺物を含む
6	10Y R4/1	褐色	粗砂
7	10Y R3/2	黒褐	砂質シルト



SG 1 d-d'			
1	土質暗渠埋設土		
2	10Y R2/1	黒	シルト 上層1
3	10Y R1.7/1	黒	シルト 上層2
4	10Y R2/1	黒	粘質シルト 底部に炭化物を含む 下層
5	10Y R3/2	黒褐	砂質シルト 下層
6	10Y R2/1	黒	粘質土 下層
7	10Y R3/2	黒褐	砂質シルト この層まで遺物を含む 下層
8	2.5Y4/1	黄灰	砂質シルト

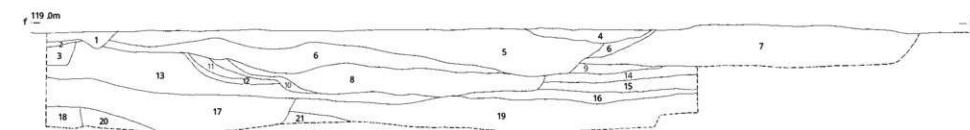
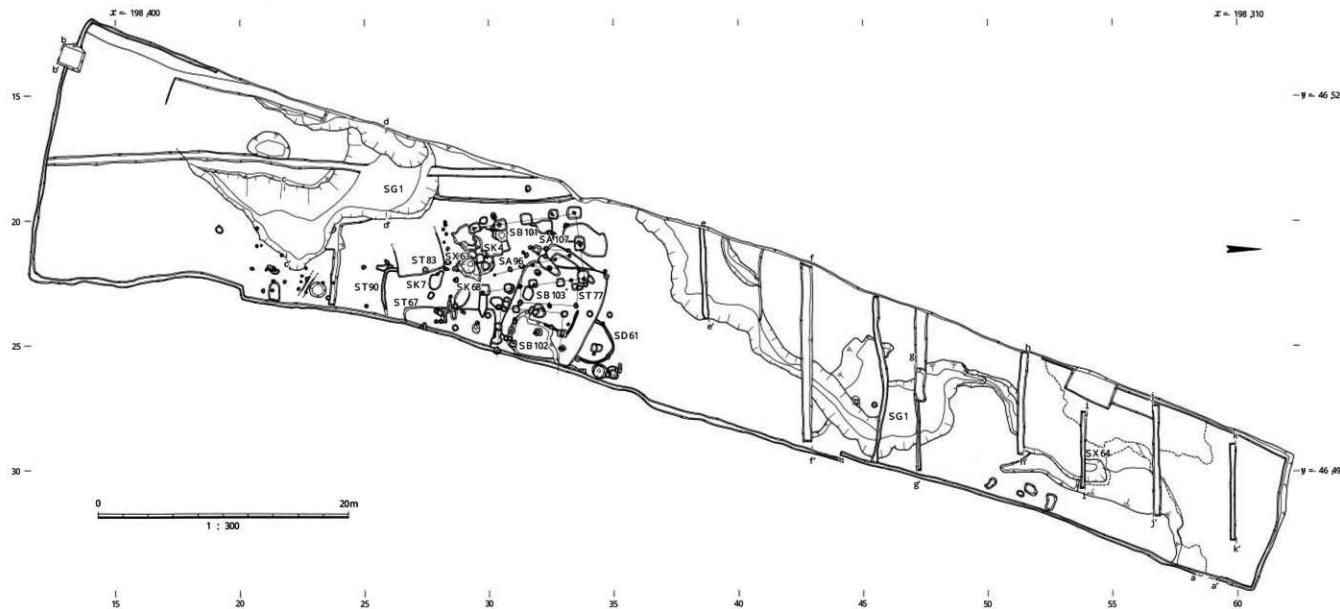


SG 1 e-e'			
1	擾乱		
2	10Y R1.7/1	黒	シルト 風化縫を含む 上層
3	砂層		遺物を含まない
4	10Y R2/1	黒	粘土 下層
5	10Y R5/2	灰黃褐	細砂
6	10Y R6/2	灰黃褐	礫層 細砂を含む
7	10Y R5/1	褐灰	砂層 礫を含む



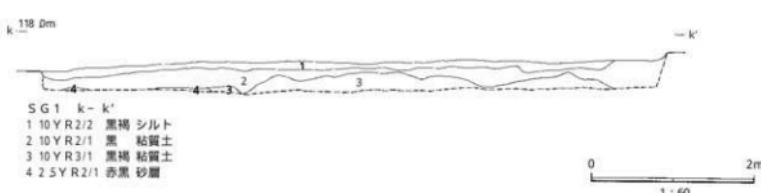
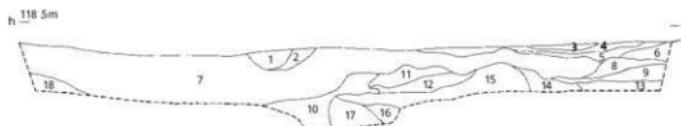
0 2m
1:60

第7図 川跡 SG 1 土層断面図



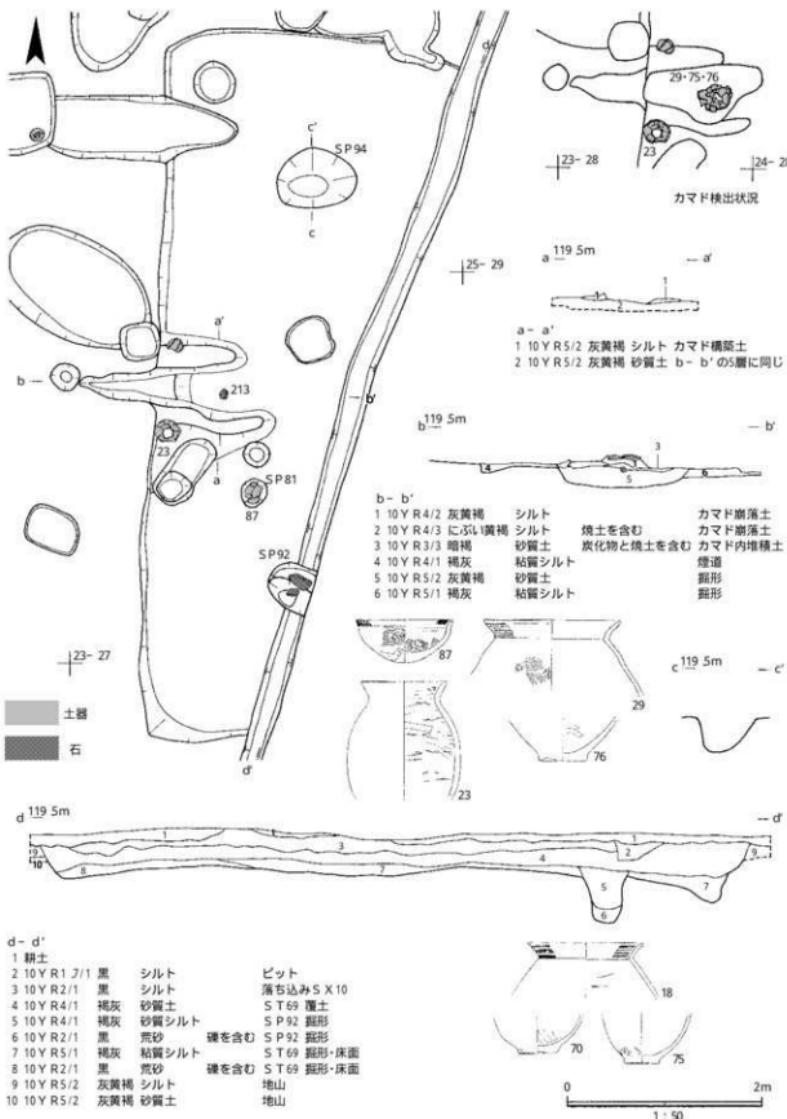
S G1 f-f' (1 : 60)	f-f'
1 疊乱	8 黄砂と硬層が交互に堆積
2 疊乱	9 10Y R4/2 黄黄褐 粘質土
3 疊乱	10 黄砂と硬層が交互に堆積
4 10Y R1/7/1 黒褐 シルト 上層	11 黄砂と硬層が交互に堆積
5 黄砂と硬層が交互に堆積	12 10Y R5/1 黄黄褐 砂質
6 10Y R2/2 黑褐 シルト 下層	13 10Y R3/1 黑褐 粘土 濁物を含む
7 径約10mm~100mmの硬層	14 10Y R5/2 灰黄褐 粘土
	15 2.5G Y4/1 線オリーブ灰 微砂
	16 10Y R3/1 黑褐 粘土
	17 黄砂と硬層が交互に堆積
	18 黄砂と硬層が交互に堆積
	19 10Y R5/2 黑褐 粘土 植物遺体を多く含む
	20 10Y R3/1 黑褐 粘土
	21 5Y3/1 オリーブ黑 粗砂

第8図 調査区全体図(1:300)、川跡S G1土層断面図(1:60)

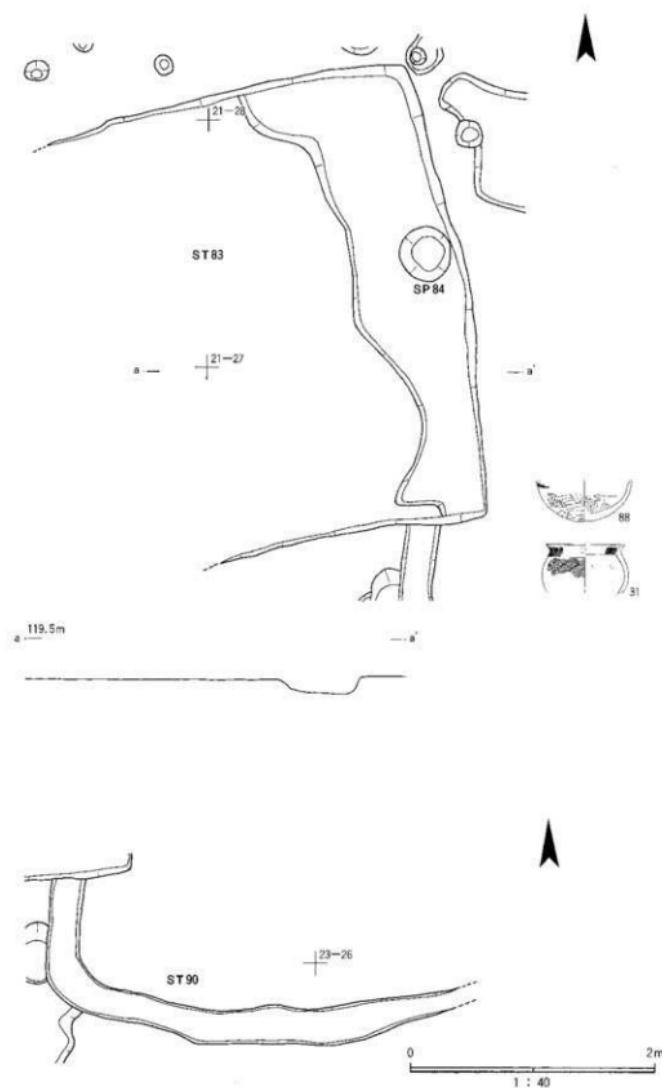


第9図 川跡 S G 1 土層断面図

遺構実測図

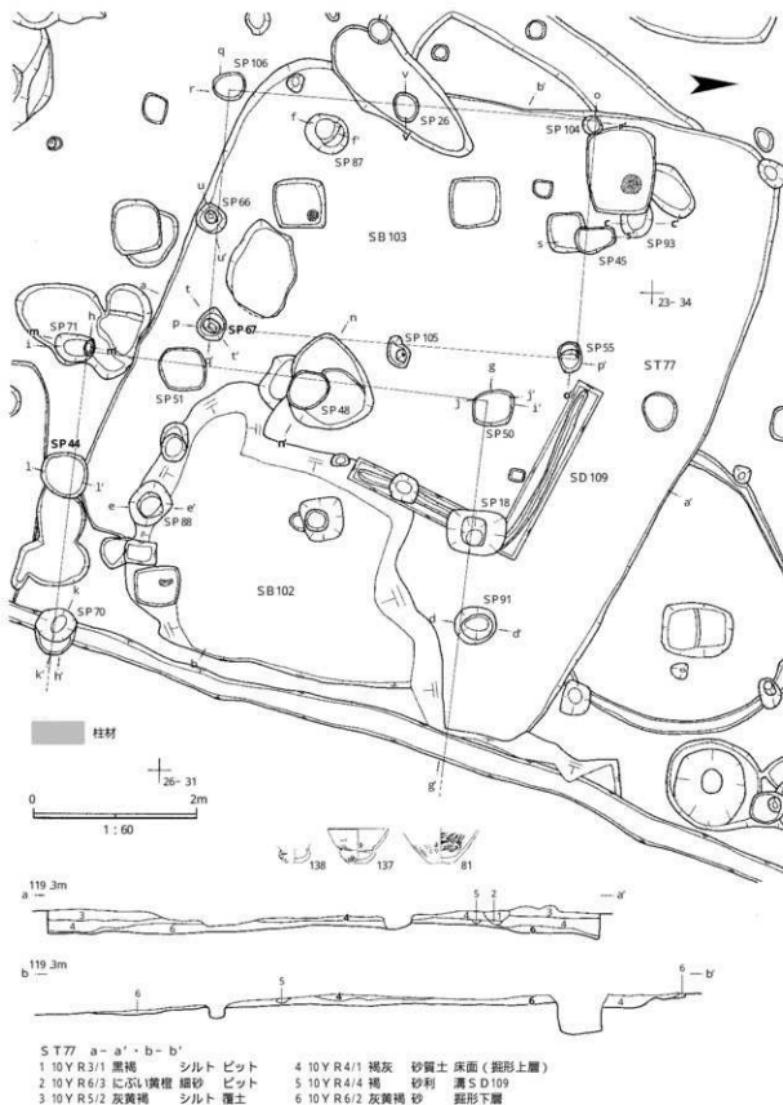


第10図 積穴住居S T 69

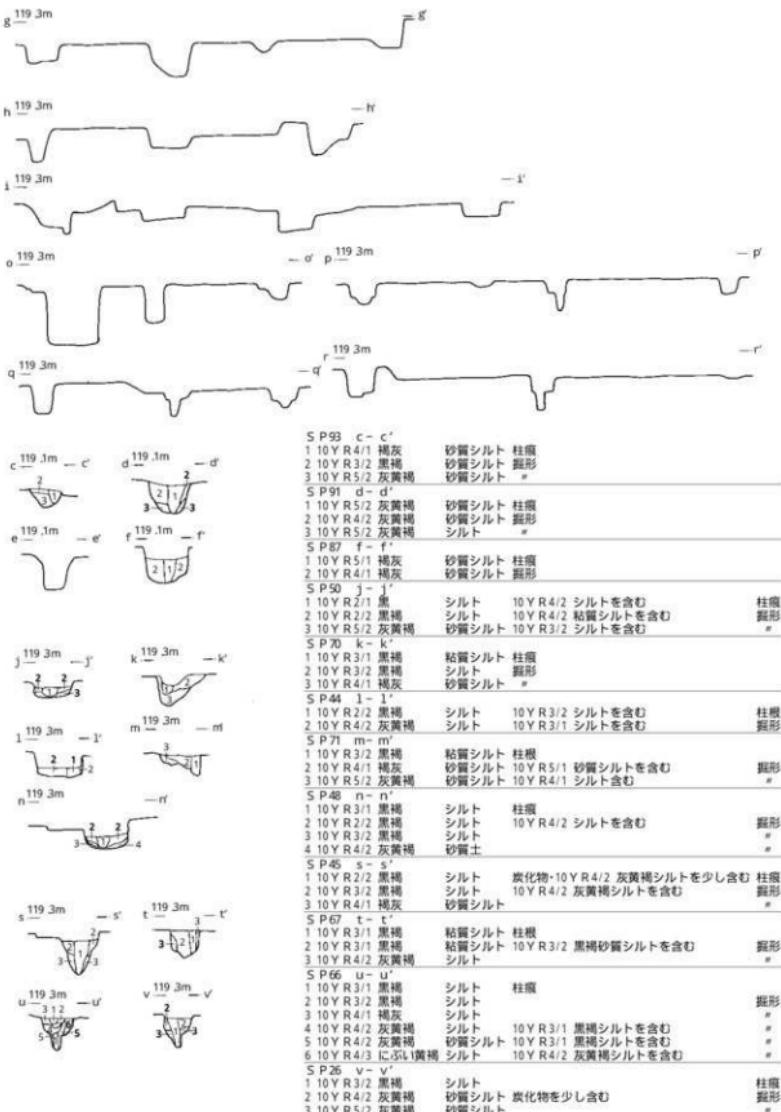


第11図 積穴住居 S T 83・90

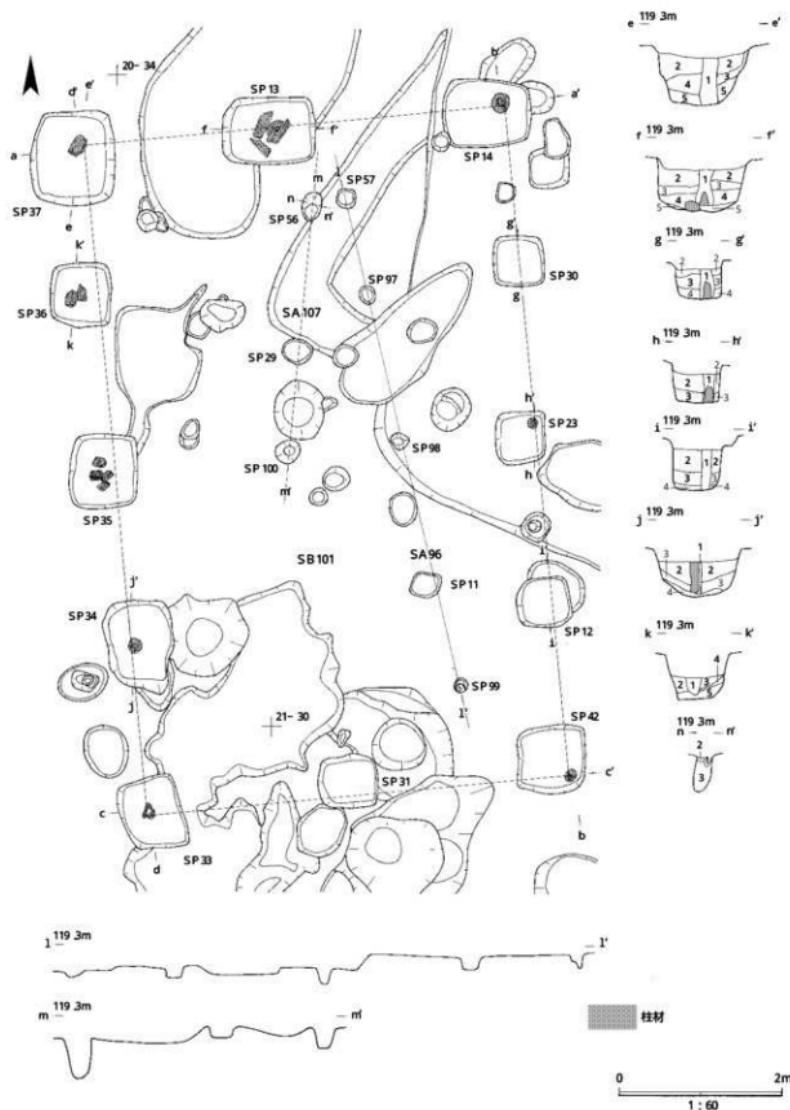
遺構実測図



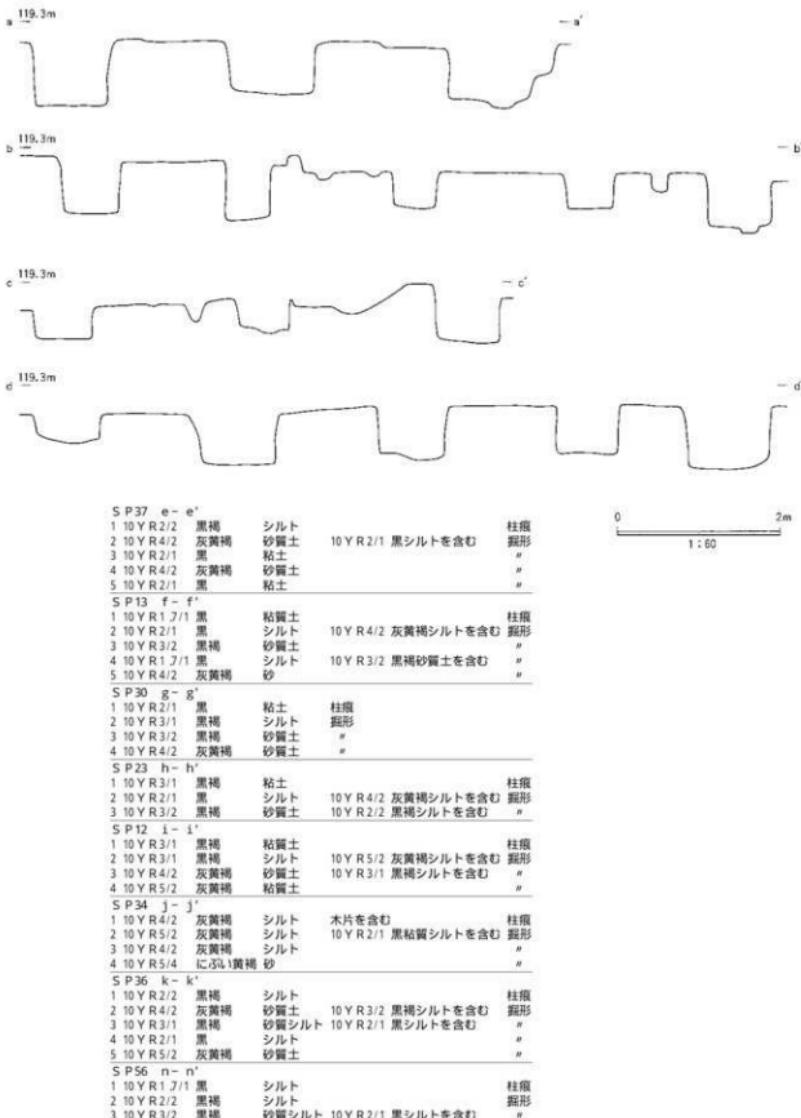
第12図 穫穴住居S T77、満S D109、掘立柱建物S B102・103



第13図 竪穴住居 S T 77、掘立柱建物 S B 102・103

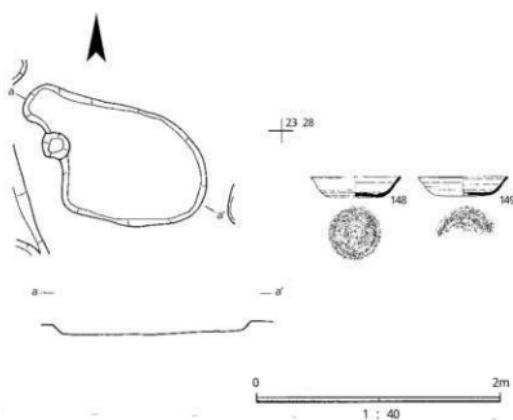
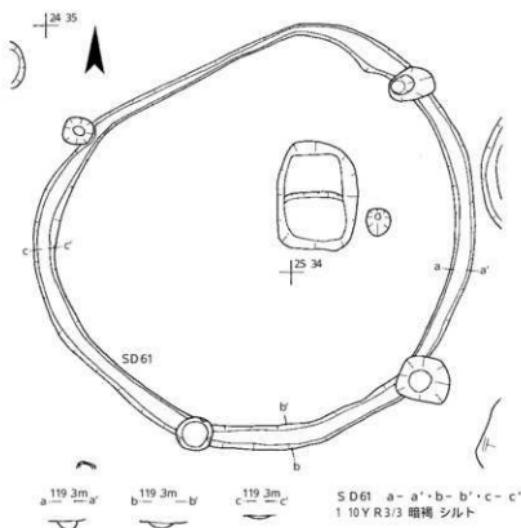


第14図 掘立柱建物 S B 101、柵列 S A 96・107

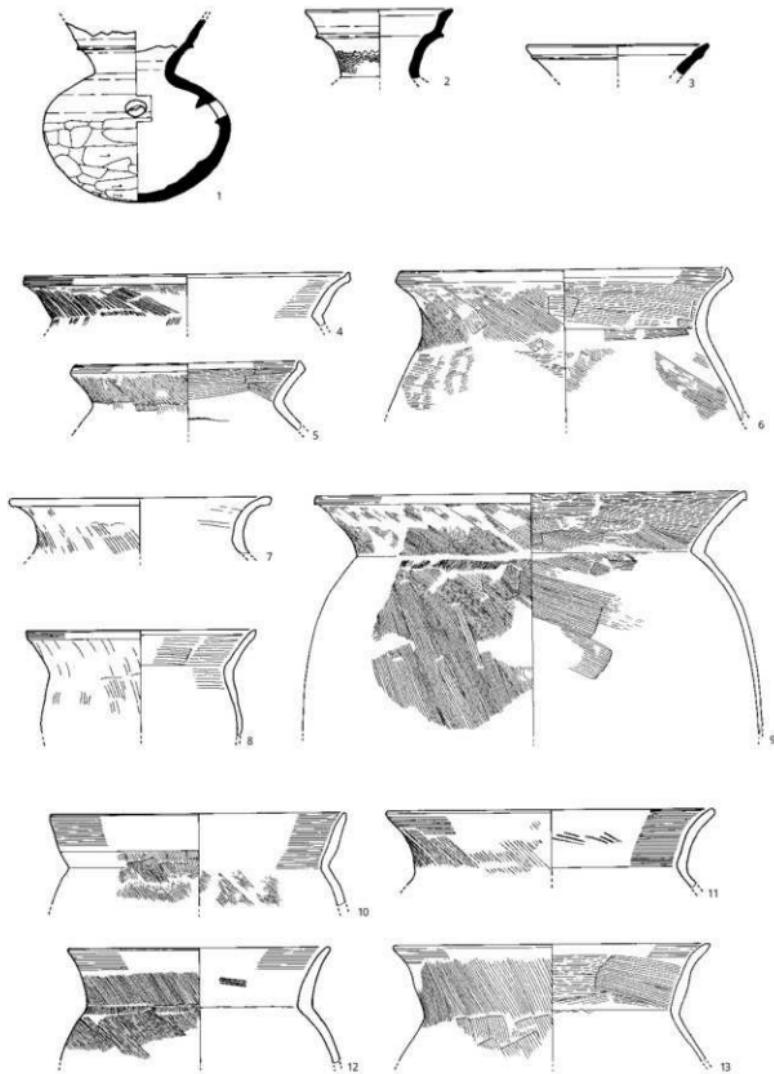


第15図 掘立柱建物 S B 101

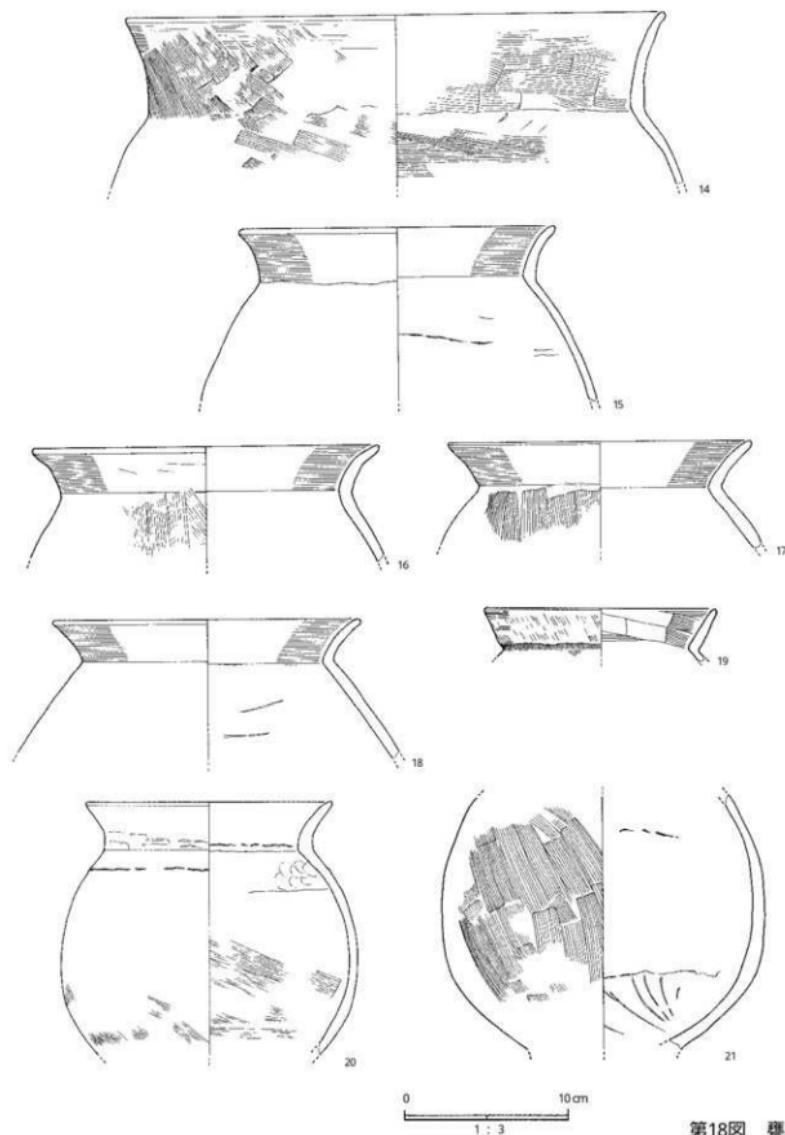
遺構実測図



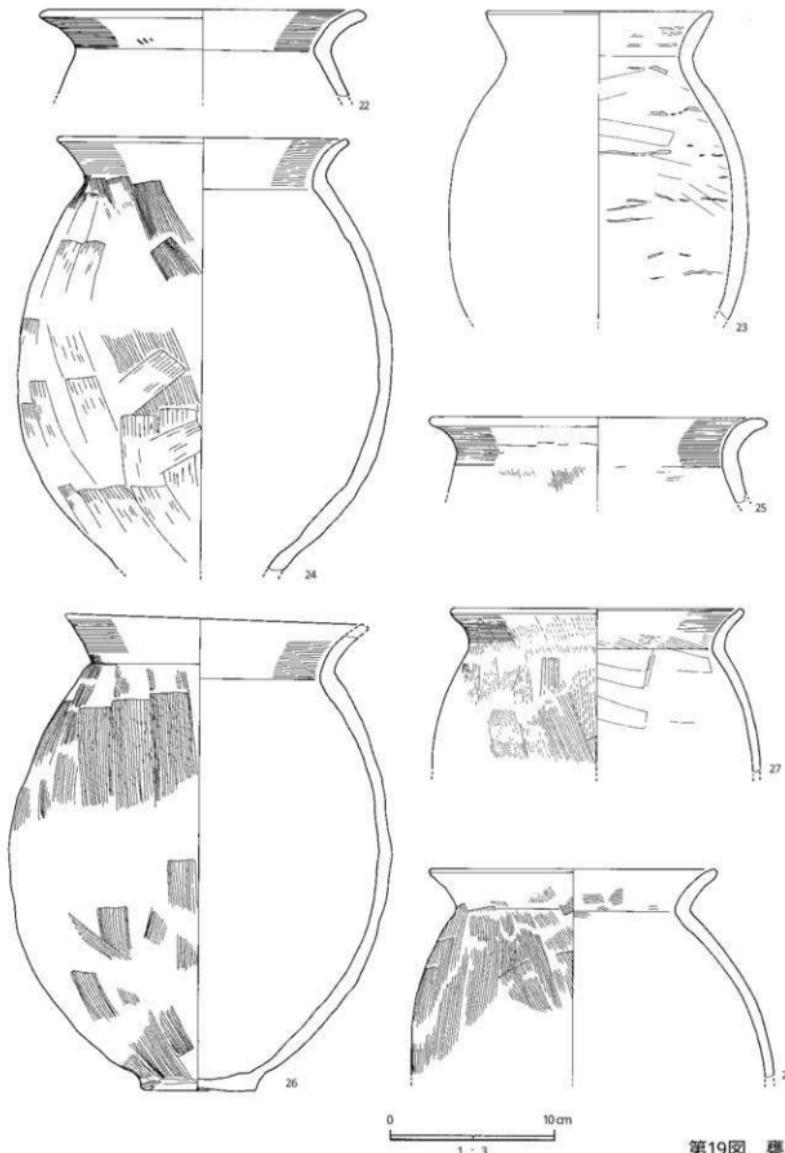
第16図 溝SD 61、土坑SK 7



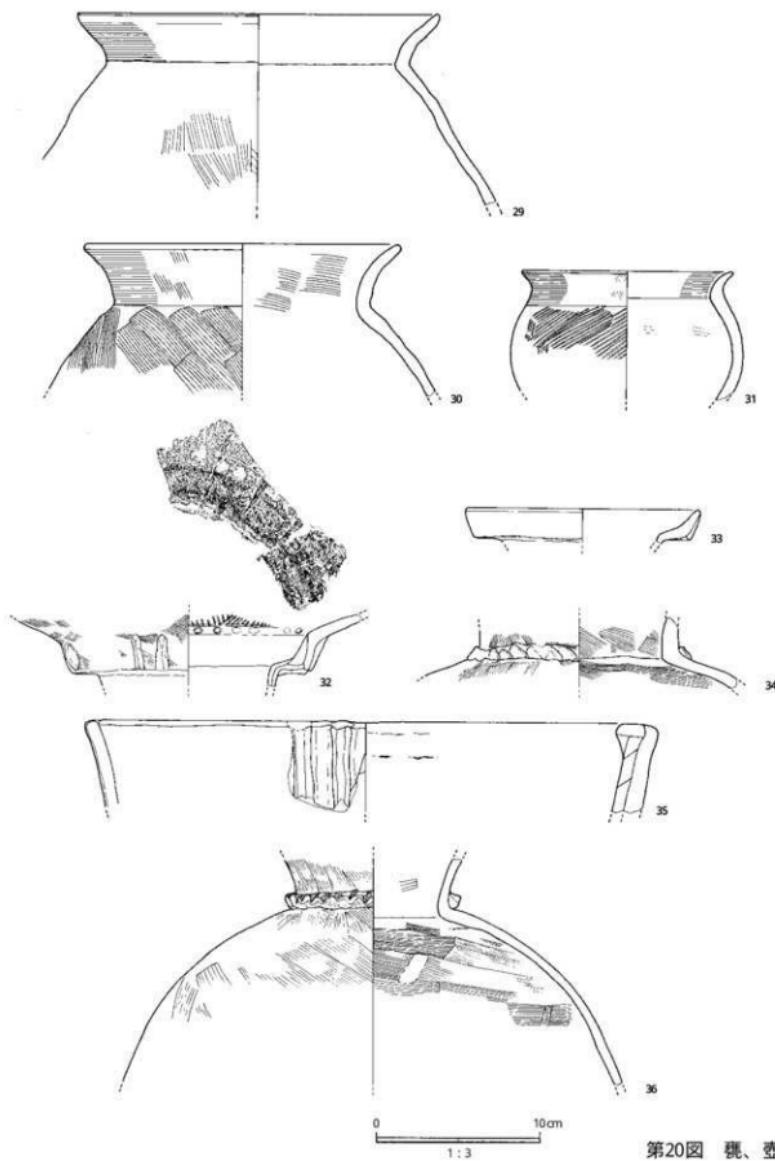
第17図 古墳時代の須恵器、土師器(甕)



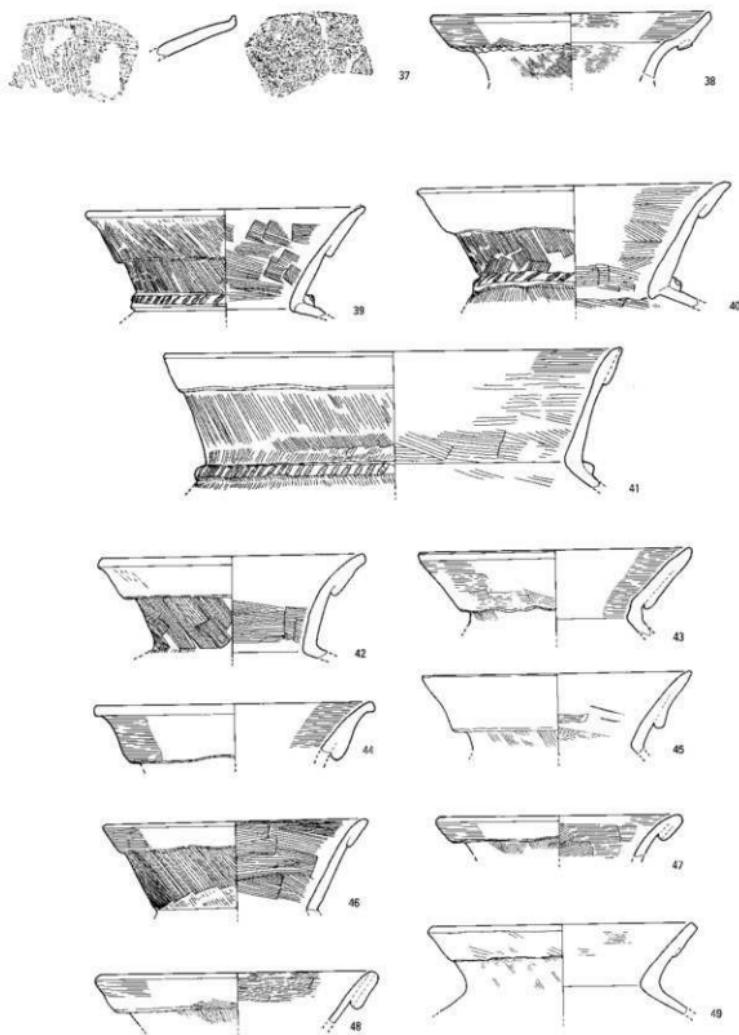
第18図 標



第19図 樹

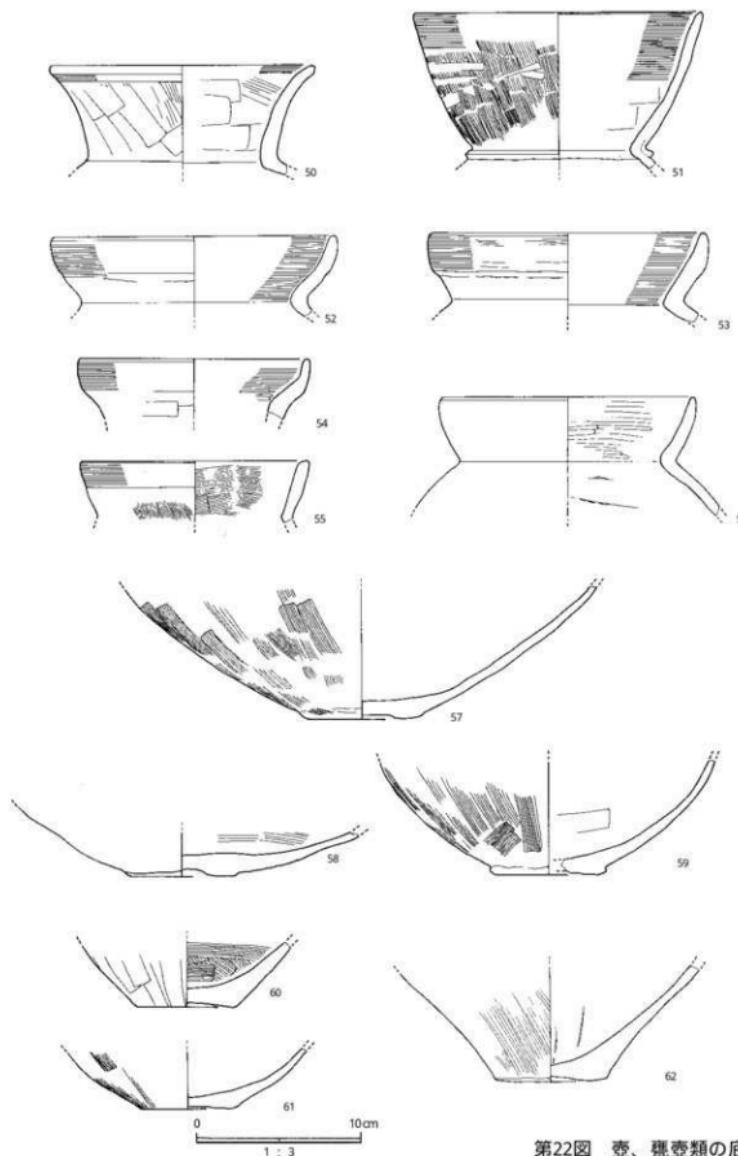


第20図 棺、壺

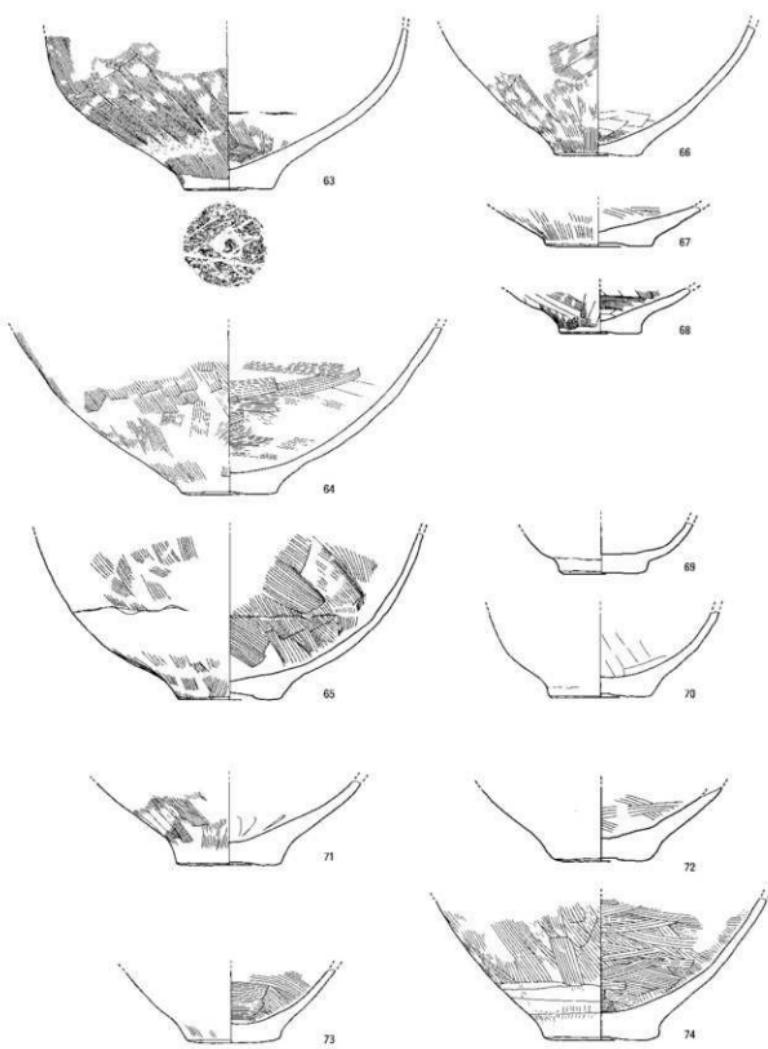


0
1 : 3
10cm

第21図 壺

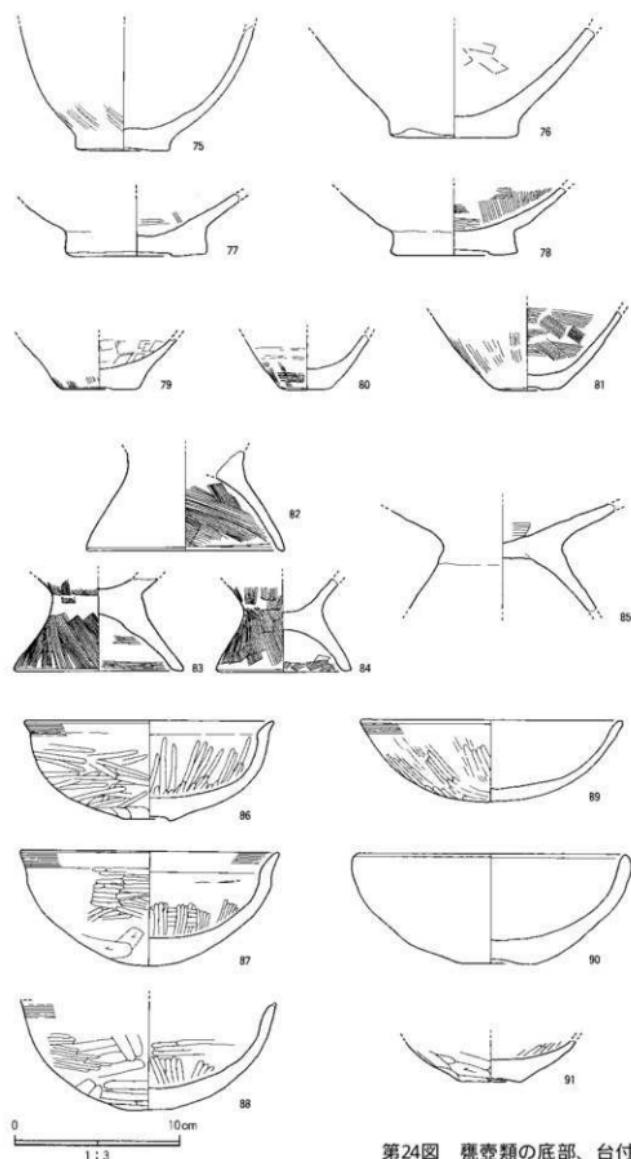


第22図 壺、甌壺類の底部

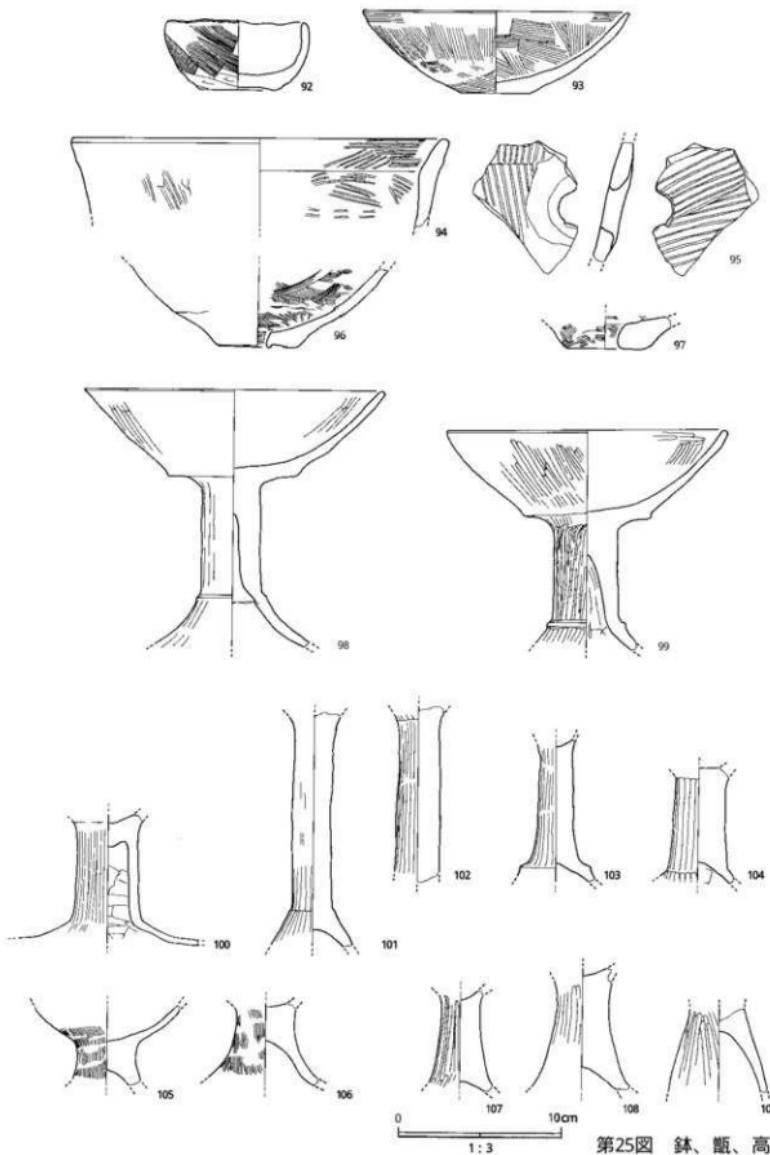


0
10cm
1:3

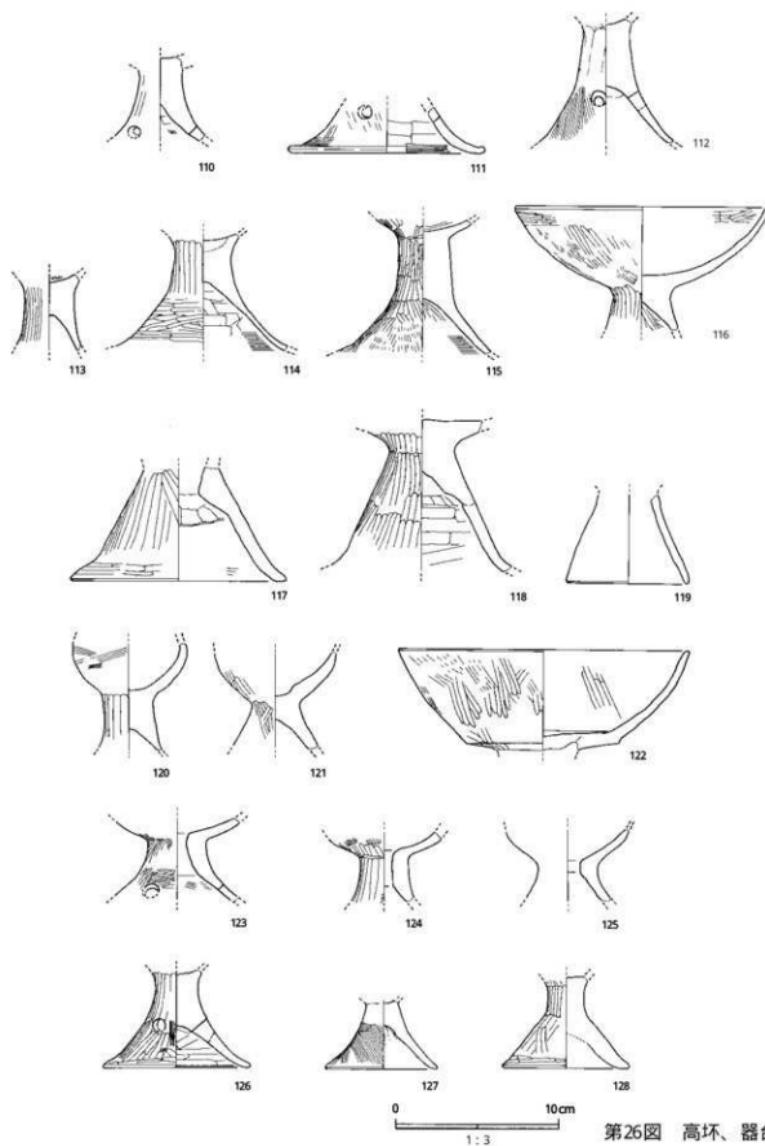
第23図 橢壺類の底部



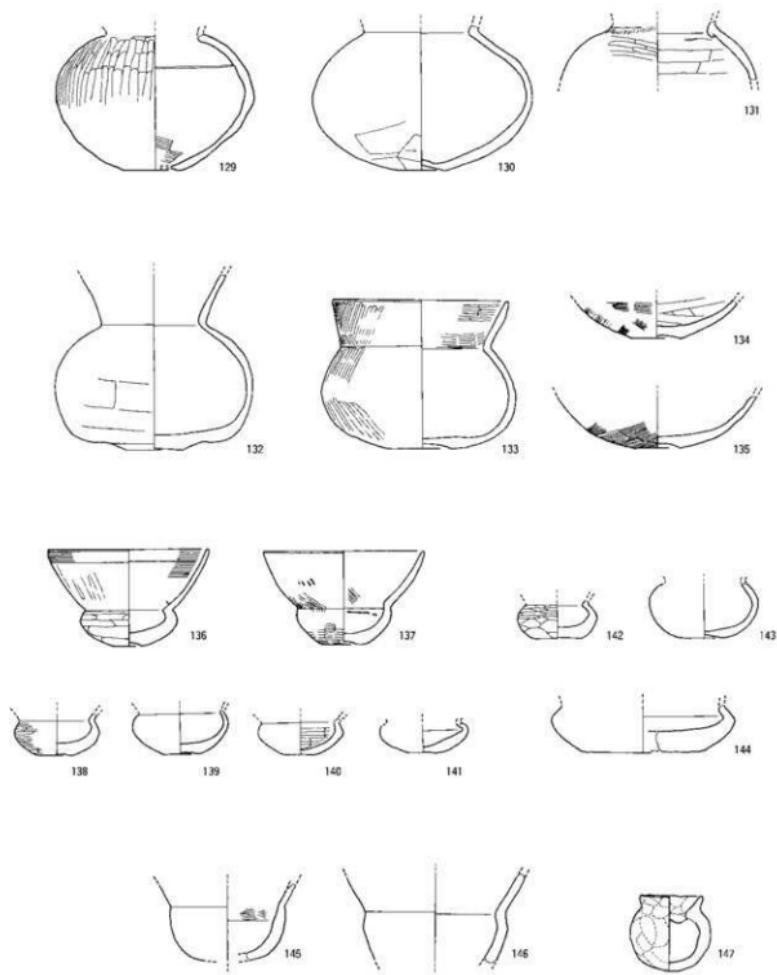
第24図 麦壺類の底部、台付壺、壺



第25図 鉢、瓶、高坏

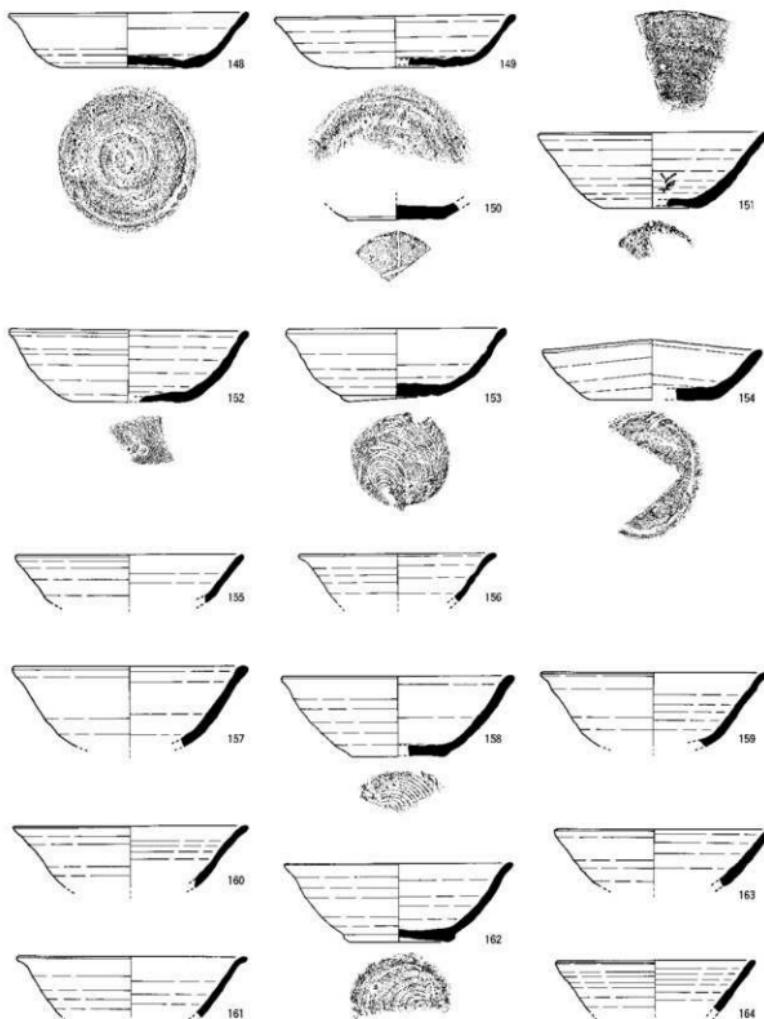


第26図 高坏、器台



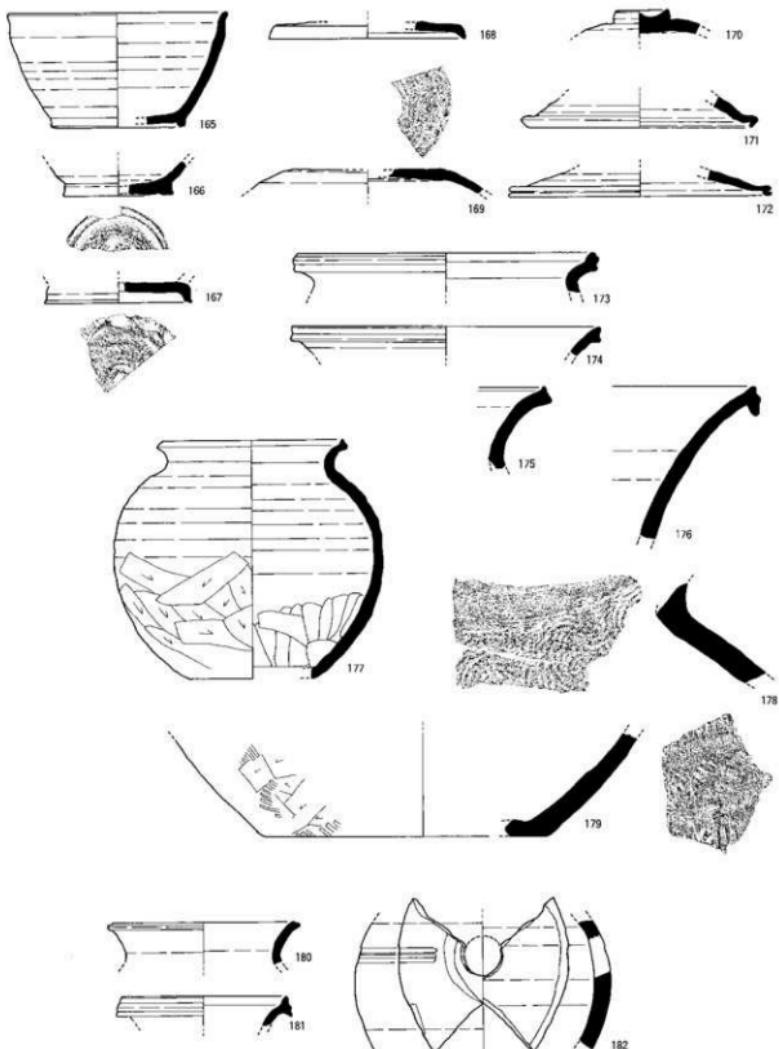
0 10cm
1 : 3

第27図 丸底壺、小型土器、手づくね土器



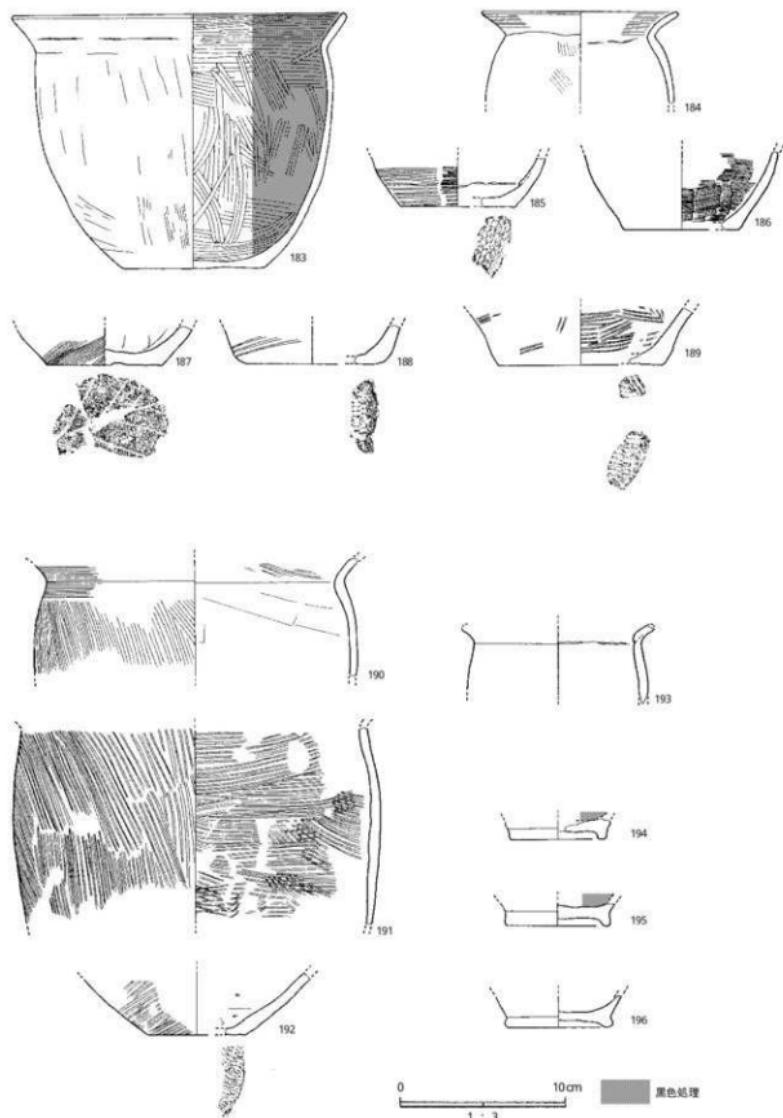
0
1 : 3
10cm

第28図 平安時代の須恵器（壺）

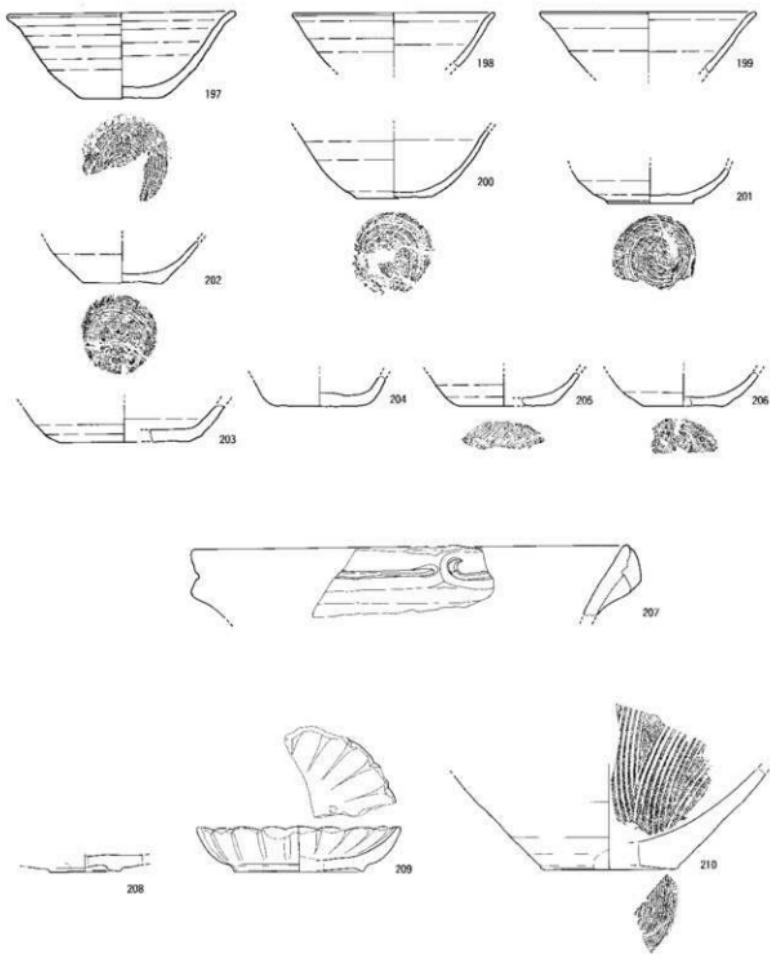


0
1 : 3
10cm

第29図 高台付坏、蓋、甕、壺、水瓶

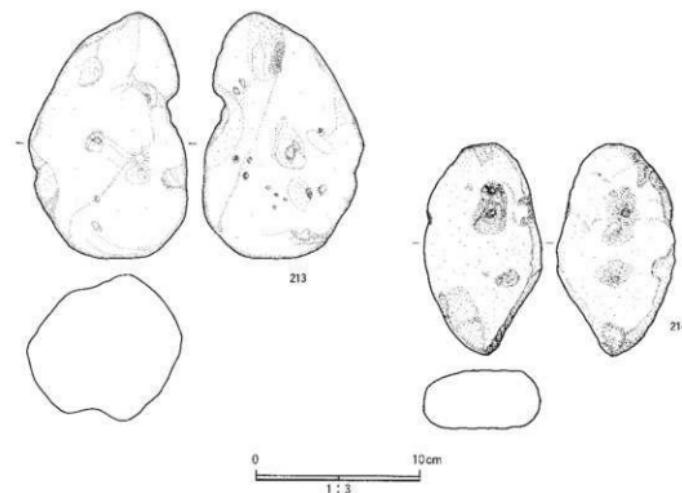
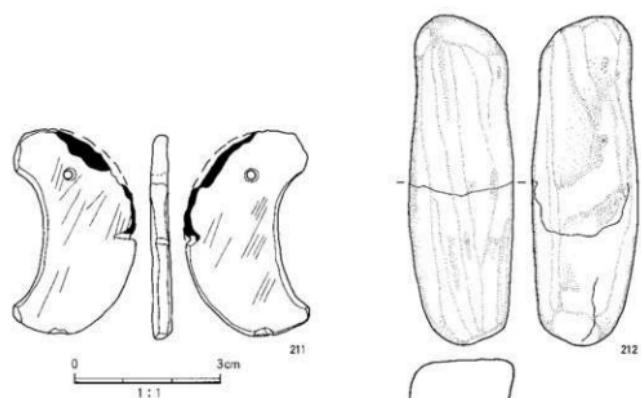


第30図 平安時代の土師器(甕) 赤焼土器(高台付坏)

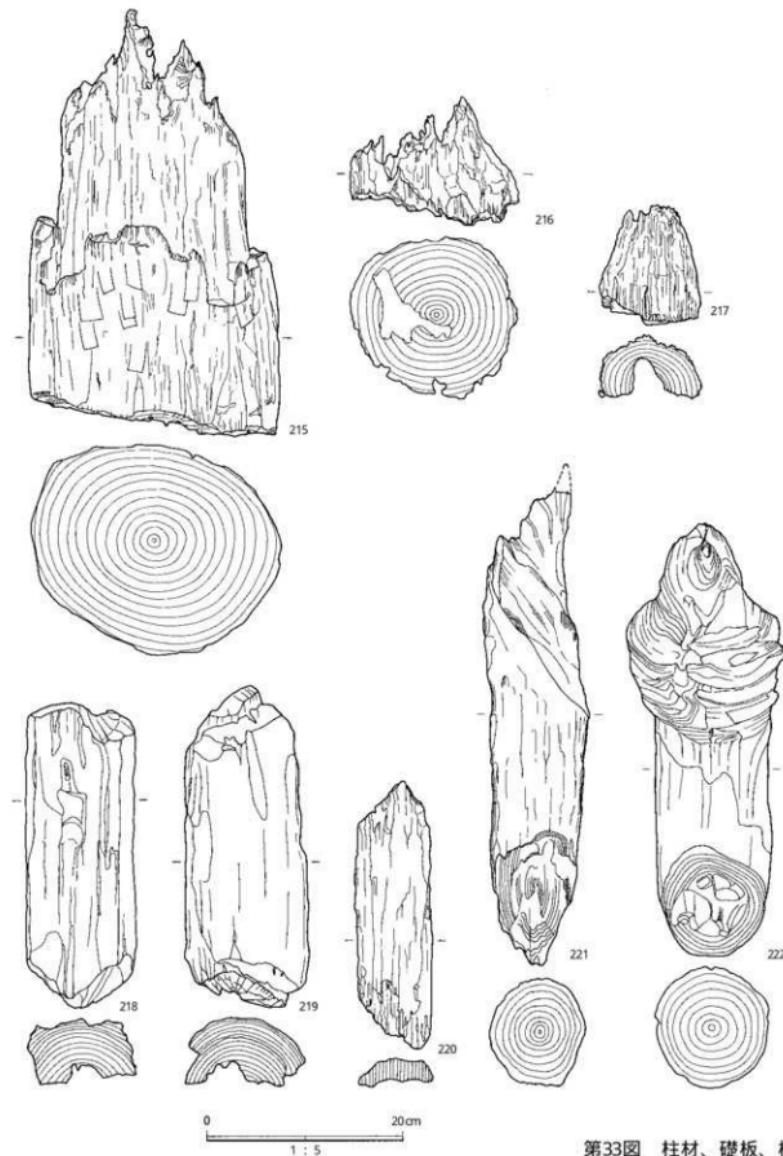


0 10cm
1 : 3

第31図 赤焼土器(坏)、縄文土器、陶器



第32図 勾玉形石製模造品、石器、碟



第33図 柱材、礎板、杭

報告書抄録

ふりがな 書名	やまがたもとやしきいせきはくつちょうさほうこくしょ 山形元屋敷遺跡発掘調査報告書									
副書名										
巻次										
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書									
シリーズ番号	第109集									
編著者名	水戸部秀樹 渋谷純子									
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター									
所在地	〒999 3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 023- 672- 5301									
発行年月日	2002年3月31日									
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因		
やまがたもとやしきいせき 山形元屋敷遺跡	やまがたけん 山形県 やまとだいし 山形市 おおあがけたや 大字片谷地 あざとやしき 字元屋敷	市町村	遺跡番号	6201	平成12年度 新規登録	38度 12分 40秒	140度 18分 7秒	20010611 20010824	2,000	花川住宅 宅地開発 河川整備 促進事業
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項			
集落跡	古墳時代	竪穴住居 川跡		土師器 須恵器			古墳時代初頭の土師器が出土。ほかにも川跡から中期までの土器が多く出土した。梁間2間、桁行4間の掘立柱建物などを検出。			
	平安時代	掘立柱建物 川跡		土師器 須恵器 (赤焼土器)			(総出土箱数: 52箱)			

図 版



調査区全景（北から）

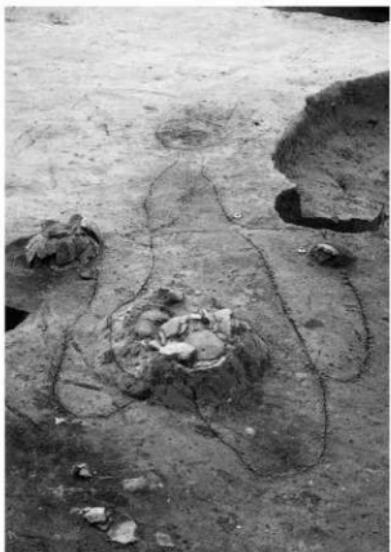
図版 2



竪穴住居、掘立柱建物など（右が北）



竪穴住居 S T 69 (北から)



カマド検出 (S T69)・東から



杯87 (S P81)



掘形完掘 (S T69・右が北)



断面 (S T69・南西から)



柱穴 S P92 (西から)

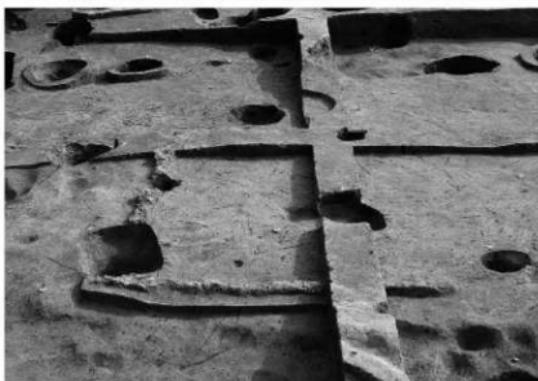


豊穴住居 S T83 (南から)

図版 4



竪穴住居 S T 77 (北から)



溝 S D 109 (北から)



S T 77断面 a-a' (北東から)



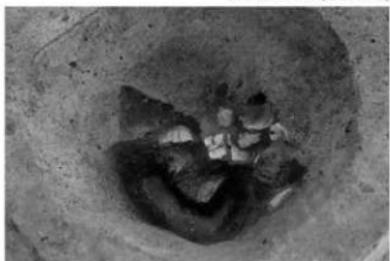
掘形完掘 (S T77・右が北)



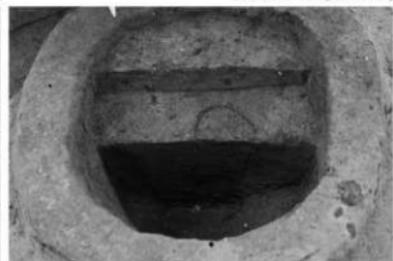
柱穴 S P93 (西から)



柱穴 S P91 (東から)



小型土器137 (柱穴 S P88・北から)

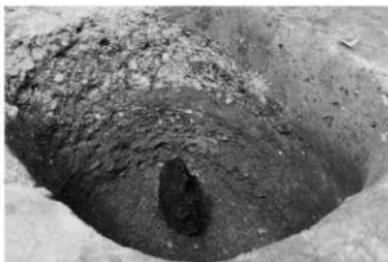


柱穴 S P87 (東から)

図版 6



掘立柱建物 S B 101 (南から)



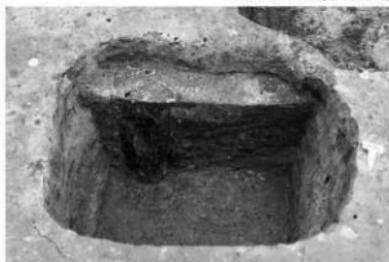
柱穴 S P 37 (南西から)



柱穴 S P 14 (西から)



柱穴 S P 30 (南西から)



柱穴 S P 23 (西から)



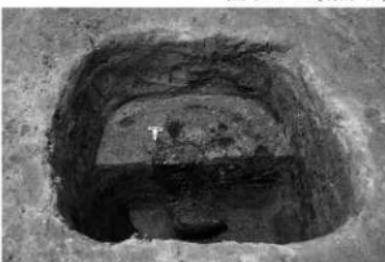
柱穴 S P42 (西から)



柱穴 S P34 (東から)



柱穴 S P35 (東から)



柱穴 S P36 (東から)



柱穴 S P13 (北東から)

図版 8



掘立柱建物 S B 102、溝 S D 61（北から）



柱穴 S P 18（西から）



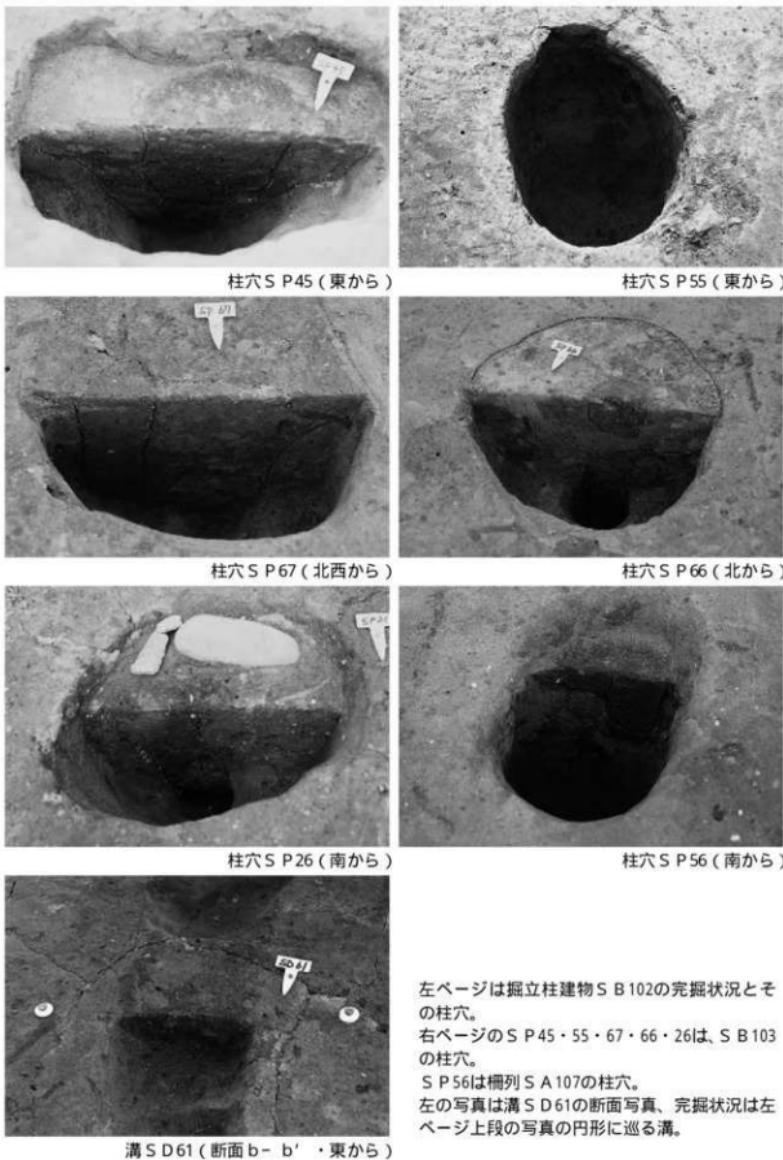
柱穴 S P 44（東から）



柱穴 S P 71（東から）



柱穴 S P 48（東から）



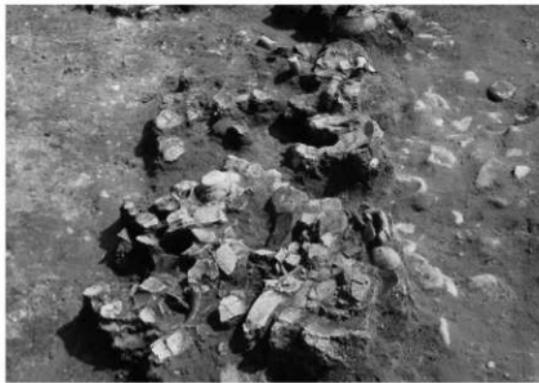
図版10



川跡 S G 1 遺物出土状況
(断面 c - c' 付近・南西から)



川跡 S G 1 遺物出土状況
(断面 c - c' 北側・西から)



川跡 S G 1 遺物出土状況
(20- 37グリッド付近・南から)



川跡 S G 1



断面 c - c'
(川跡 S G 1・南東から)



断面 d - d'
(川跡 S G 1・南東から)



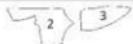
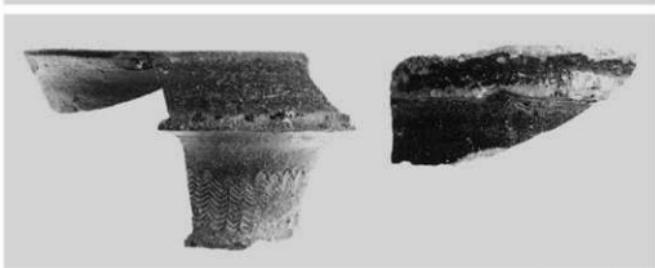
断面 e - e'
(川跡 S G 1・南東から)



断面 k - k'
(川跡 S G 1・東から)

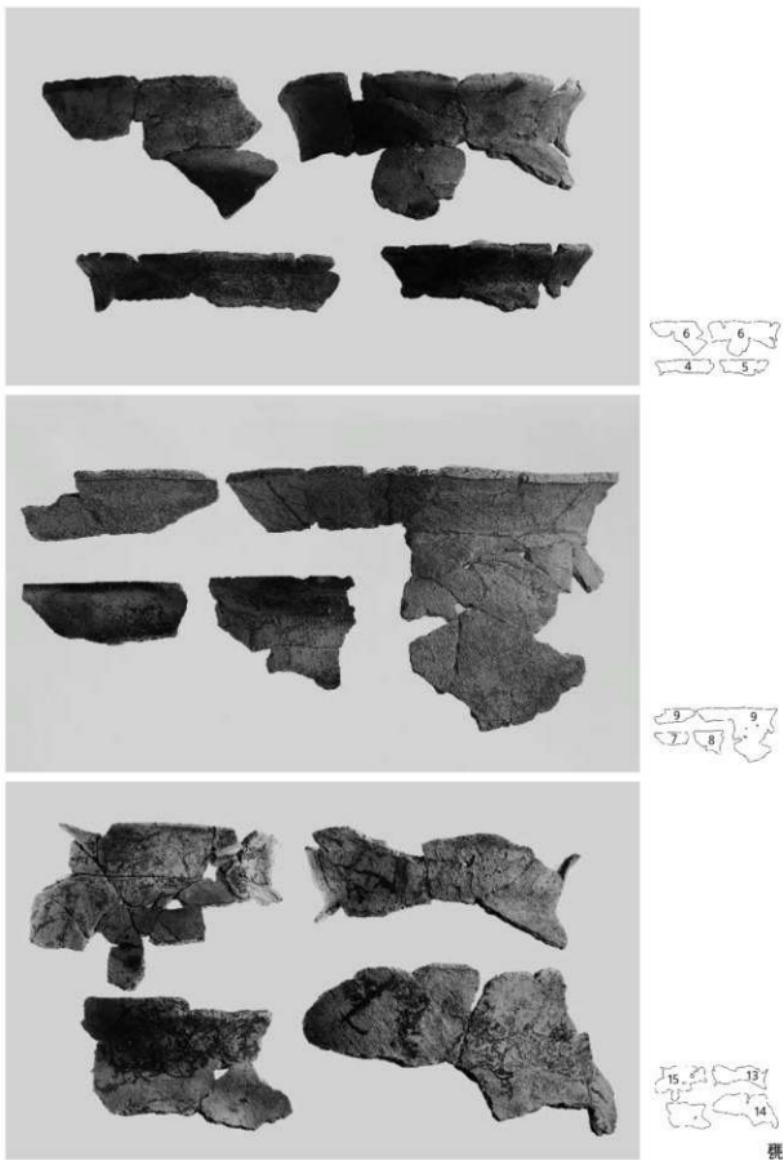


1



題

图版14



図版15



26

24

23

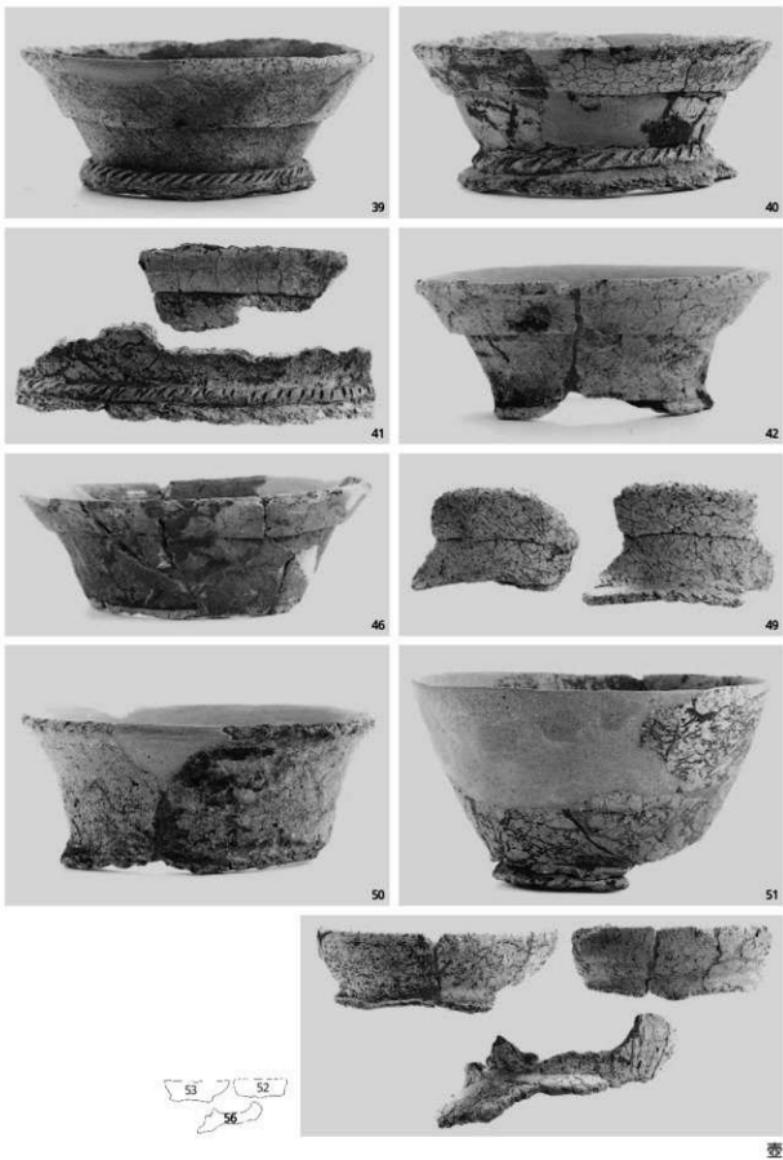
21

图版16

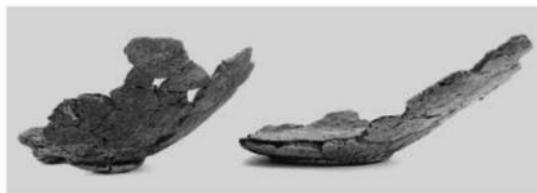


36

壺



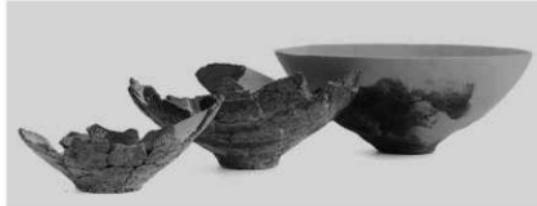
图版18



59 57



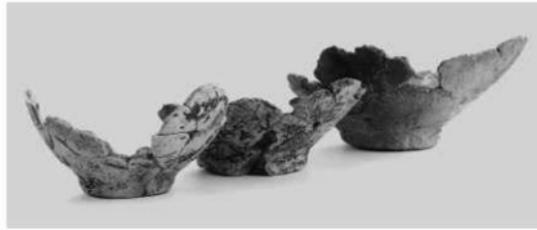
61 60 62



66 63 64



69 70

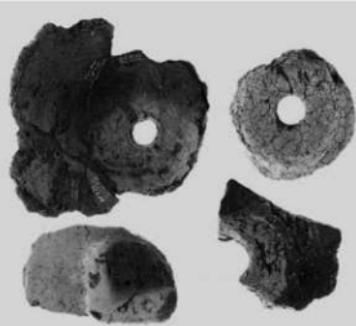
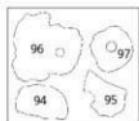


75 76 74
櫛壺類の底部

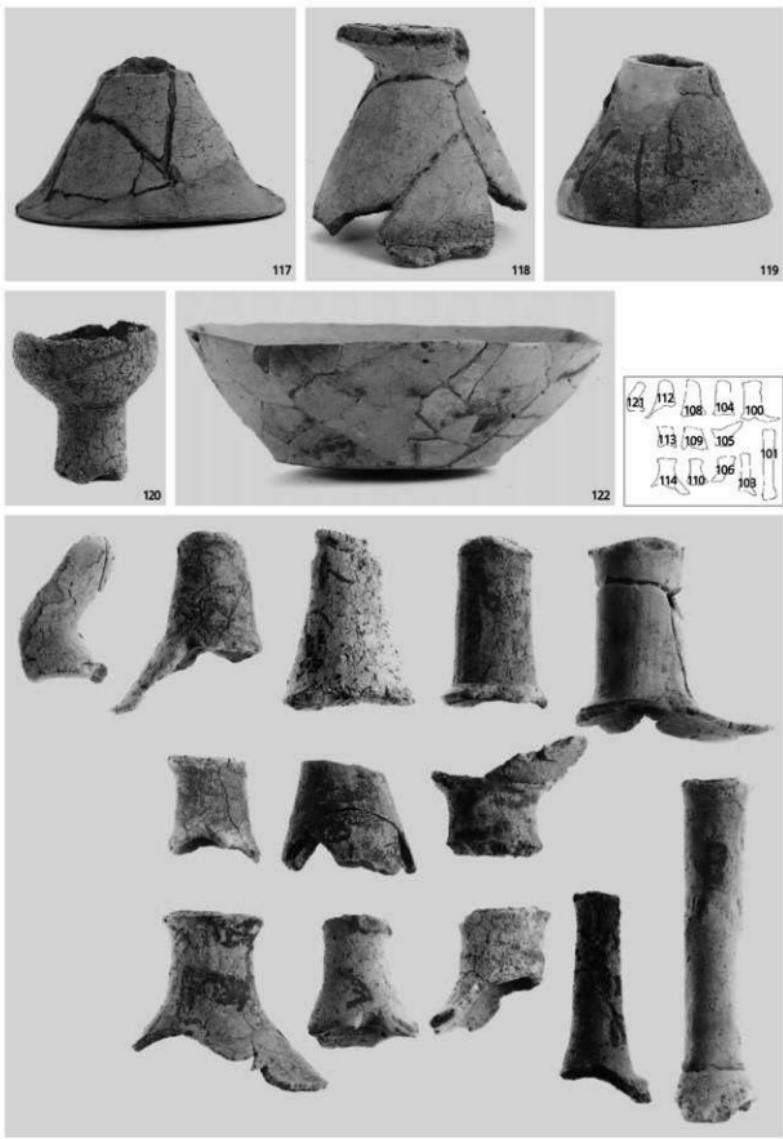


橢壺類の底部、台付橢、杯

图版20



鉢、甌、高坏



高环

图版22



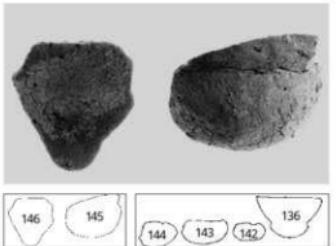
器台、丸底壺



136

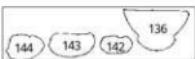


137



146

145



144

143

142

136



147

小型土器、手づくね土器



奈良・平安時代の土器



148



149

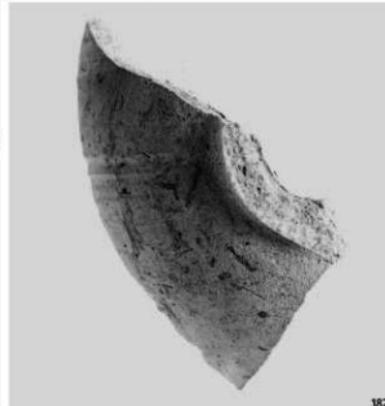


151

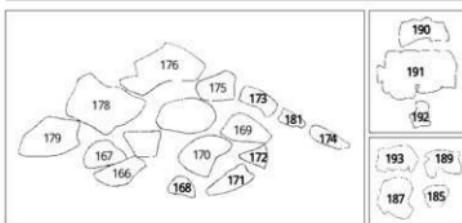
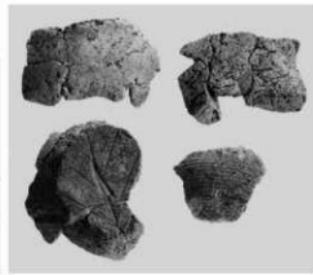


151

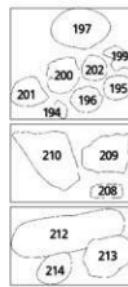
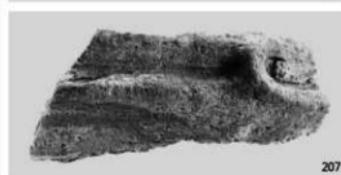
坏・ヘラ書き



坏、高台付坏、壺、蓋、水瓶



その他の須恵器、土師器(甕)



赤焼き土器、縄文土器、石器、碟



211



215



216



217



218



219



220

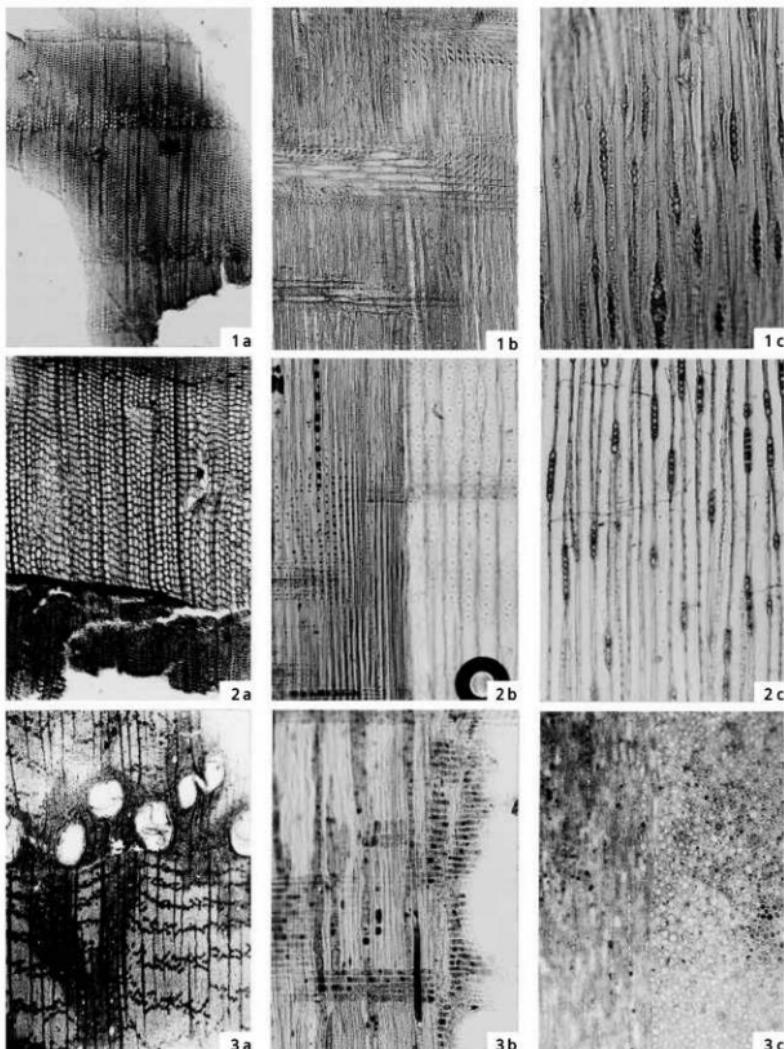


221



222

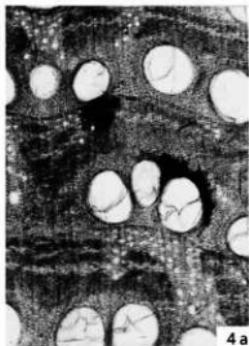
勾玉形石製模造品、柱材、礎板、杭



1 マツ属複数管束属 (221)
 2 スギ (RW165)
 3 コナラ属コナラ亞属コナラ部 (218)
 a : 木口 b : 樋目 c : 板目

— 200μm : a
 — 200μm : b · c

図版30



1 クリ (RW84)
a : 木口 b : 横目 c : 板目

200 μ m : a
200 μ m : b・c

木材 2

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第109集

やまとたもとやしき
山形元屋敷遺跡発掘調査報告書

2002年3月31日発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター

〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号

電話 023-672-5301

印刷 大場印刷株式会社
